明治廿七年三月五日發行

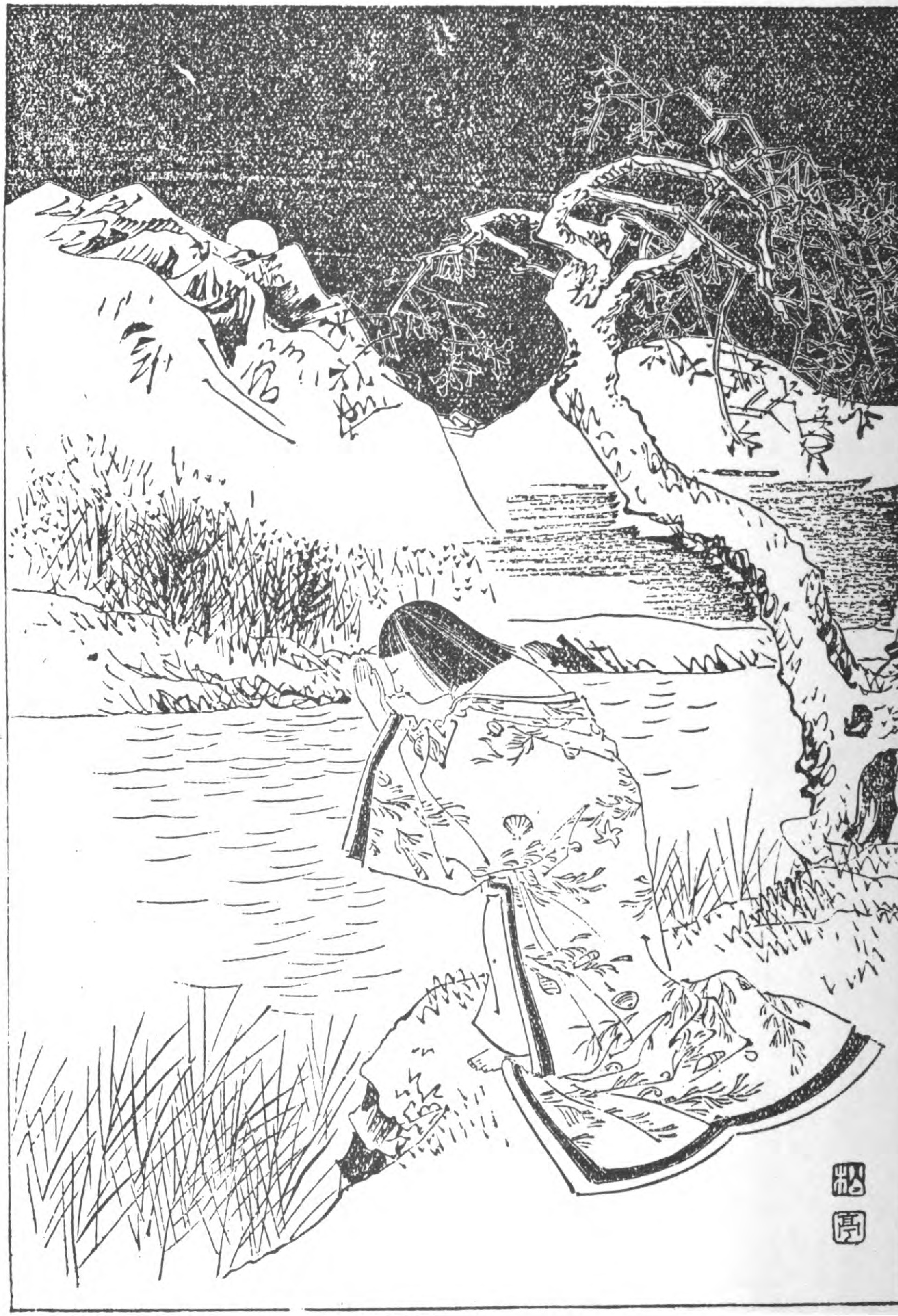
女鑑

第五十八號

東京國光社

女鑑第五十八號目次

夜叉御前



女鑑

雅俗の別

如何なるものを、風雅とし、如何なるものを、卑俗とすべき。人たるもの、よく、此のけじめを別かちて、其の身の品位を高尙ならしむべきなり。風雅とは、優美なる衣服を纏ふ謂ふもあらず。又、華奢なる器物を愛する謂にもあらず。唯、其の心の、何となく、優しく、和にして、其の行の鄙しからず、其の言語の、殊に穩にして、而かも、情深く、恰、春の日に、鳥歌ひ、花咲ひて、天地の間、何となく、長閑やかなるが如く、自然の心情の露れ出づるものをいふ。故に、目の貌は明に、鼻の貌は正しく、口の貌は直く、耳の貌は聰く、立つ貌は

靜に、動く貌は優しくといへる如く、衣服飲食より、室堂器具の末に至るまで、能く、其の心を用ゐて、決して、無要のことなく、驕奢淫佚の振舞なく、世上の交際にも、理を失ひ、禮儀に悖り、人情に遠ざかることなく、しかも、其の情誼の、最美しきこそ、信に、雅馴して、風儀あり、韻致ある人といふべきにて、こよなく尊く、愛でたき行にはあるなれ。

卑俗とは、之に反對せるものにて、唯、其の弊衣惡食の爲のみならず、其の心の惜き所といひ、其の身の行ひ方といひ、又、其の言語に至るまで、一として、皆、卑しく鄙びて、冬の林の寥落たるが如く、落葉の、霜を帶びて委朽せるに似て、如何にも凄じき所あるをいふ。故に、衣服調度は、いふも更なり、其の平生の言動にも、優然たる所は、少しもなく、嫻雅なる精神は、露だにあらざれば、心は

険しく、行は情なきことのみなり。而して、私の振舞には、奢侈傲放のみ多くして、其の行儀作法には、氣附かぬことのみなるものをいふまて、風韻も、雅致も、其の身に止まらぬ此上なき卑しく、俗なる行なり。

さて、この雅と、俗とは、固より、人の行の上のみに限らず、總べての事に、必、あることとなれども、取り分け、深く注意すべき要點なり。たとへは、一花一草を愛するにも、其の人の雅なると、俗なるとは、見分けらるゝものなり。又、一器一具を弄ぶにても、其の志の高尚なると、卑俗なるとは、判然すべし。されは、雅なるものは、驕らずとても、見苦しきこともなく、貧しきとても、鄙びたることなし。俗なるものは、之に反す。故に、其の心志も、行儀も、將、其の愛する所も、其の玩ぶものも、悉、皆、卑しく、俗ならぬはなし。斯の如くにして、同

じく、人となりなば、果して如何。

凡て、物の雅なると、優美なるとは、人の愛玩を受くること、必、甚しきものなり。其の俗なるもの、卑野なるものに至りては、之を顧みるものもなかるべし。これ、自、其の品位も、資格も、人の好惡も、亦、定まるものなりといふべし。夫、物の好惡雅俗は、人、よく、これを定むることなれば、物にありては、自、勞することなけれども、人の好惡雅俗に至りては、物の、能く辨ずる所にあらず。必、人の判別すべき所たらずはあらず。吾人、是に於いてか、之を、諸孃に質して、其の判定を誤らずして、事物百般に就いて、總べて、皆、雅に從ひ、高尙に從ひ、俗を去り、卑野を去りて、其の品位資格を高め給はんことを慫慂して止まざるなり。

論説

古今の人心

岩下方平

人の心には、古も今も、少しも異なることはなきものなれども、其の發する所の痕跡にて、之を見れば、古人と、今人とは、著き差あるべく思はる。これ必、深き原因あることなるべし。凡、今より、百年乃至二百年も以前と、今日とは、固より、世の中の有様は、大に異なるものにて、同日の談にあらざるなり。かく、世の有様の異なるには、人情の變化も、風俗の厚薄も、必、相附隨するものなれば、人は、同一の人にして、心は、同一の心なれども、その發して、外に著るゝ所のものは、甚しき變化を生じて、全く、正反對にもなることあり。こ

れ、能く、注意して見るべきものなり。

徳川氏、大亂を平げて、文教を施きてより、世の中、次第に治まりて、人々、知らず識らず、昇平の化に從ひて、人情、自、淳厚となり、恥を重んじ、行を愼み、人々、相互に、和らぎ親しむこと、其の本心より出づる情誼なれば、其の風俗の篤きことは、言ふまでもなし。故に、此の間の歴史を觀るに、節義正しき人の事實など、いと多し。これ、皆、其の證となすべし。

彼の時代には、固より、今日の如き學術はなかりしなり。又、教育の法も、今日の如きには、非ざりしなり。然れども、其の道徳心に富み、公義心の厚きことを、今日の、いとも浮薄極まりたる人情、風俗に引き當たらんには、如何ぞや。これ、はた、自然の人情によれるか。將、又、教化の然らしむるところな

るか、同じく、人と生まれて、同じき心を持ちながら、斯くも、著く差異あるに至れるは、抑、亦、如何なる故ぞ。今を去ること、二三十年前にも、今日よりは、尙、情深きものゝ如し。況して、五十年七八十年も以前に生まれたるものは、とても、今日の世の中には、立ち並び難き程に、質直淳朴なるものゝみなり。これ、亦、其の人々には、自然の習慣となりて、少しも、其の心には、餘念なく、都て、人たるものは、斯くの如きものと思ひ入りたるものなれば、其の行は、一も、殊更に、修飾する所などあることなし。斯く、篤行を以て、常とせる故に、其の心の穩にして、其の動作の靜なること、今日の人の比にはあらず。余の如きも、亦、德川時代の風俗は、よく知れるものなれば、今日の如き、世態も、人心も變化して、輕薄極なき世の中の有樣を見るに附けては、實に、今

昔の感に堪へざることとなり。いかにしても、嘆かはしきは、この人心の變化にこそ。嗚呼、いかにせば、これを矯正し、匡救することを得べき。世に、自稱道徳家ありて、徒に、空言を事とすとも、遂に、實際に補なし。噫、如何せば可ならん。

諺にも、朱に染めば赤くなるといへる如く、今の世に生まれ出でたる人々には、更に、古人の如き感念だに存せざれば、其の變化などいふも、適切なる關係は、到底知ることを得ざる故に。老いたる人のいへることをも。輕んじて。信ぜざるの傾向ありて。今の非薄なるが。誠の人情ならんと思ふもの多かるべし。これ。則。人の薄情となりたる適例にして。理に暗きも。亦。甚しきものならずや。今日の人にして。篤實の行。親切なる情あるもの。極めて稀なるは。全く。

これが爲なるのみ。斯かる世。斯かる人のみの時を、開明とて譽め囃すとも、誠に、道を知る人には、いかに視らるべき、世人、苟、能く、古人の、今人に勝れる所あることを知らば、宜しく、速に、其の身に省りみて、其の非を正すべし、心の用ゐる所にして、其の道に違ふことなくは、必、其の正理にかなふべし、朋友と云ひ、兄弟と云ひ、父子、夫婦と云ひ、苟、其の情義の篤からざらんには、又、何を恃みてか、斯の世を過ぐすべき、若、能く、思を、此に止めは、人たるに於いて、過つ所なきのみ。

或は、此の義を察せず、人の交情の親切なるは、却りて、諂佞に近く、又、關渉に過ぐるなどの妄言を爲し、亦、皆、各個の事、何ぞ、深く、之を憂へんなどの無情を以て、自、善とするものあり。これ、實に、倫理を壞り亂り、人情を

傷ひ害するの、最、甚しきものにて、宜しく、痛く、排撃すべきものなり、又、世の婦人女子にして、苟、斯かる僻論に惑はず、其の身の德は、將、又、如何にしてか、之を回復することを得ん、吁、亦、最、深く、古人の言行の篤實親切なるを鑑み、今の世の心を變化して、寧、古に復せんことを勉むべし、これ、又、稽古徵今の道なり。

女子要言　第二篇（廿八）

三輪田眞佐子

其の七　結論

如何なる女子を、完備なる女子と謂ふべき乎。曰はく、心術を磨き、本分を知り、女藝を辨へ、容儀を調へ、亦、能く、人に接するに、忠恕の心を盡くし、而して、

生活の方法は、高尚にして、少も欠點なく、以て、好人物と言ふべきものは、完備なる女子と云ふべし。故に、吾は、以上の六章に於いて、既に、此の順序に從ひ、卑見を述べたりき。若、吾が言にして、幸にも、大なる誤なくば、處女、婦人の別なく、貴嬢、賤女の隔なく、一般女子の標準として、亦、大なる誤なからん。思ふに、磁針なくして、誰か、能く、萬里の波濤を渡る、而して、世は、一種の海洋なり。此の世を渡る女子は、恰、其の身、葦舟に似たり。されば、一定の標準なくして世海に入る女子は危哉。蓋、吾が邦の今日は、維新以來、廣く、智識を、世界に求たるより、既に、緒論に述べし如く、西洋主義の女子と、東洋主義の女子との間に軋轢を生じ、各、其の主とするを揚げて、他を卑しめり、從ふて、其の間に立つ女子、適從すべき標準を失ふめり。吾が腐言を重ねしも、之を歎

くに外ならず。豈、他意あらんや。

茲に、標準と云ふも、吾が一個の臆測にあらず、萬古不易なる天然の眞理に基くものなり。見よ、春風吹けば、雁、忽、北に飛び、秋風吹けば、燕忽ち南に去る。斯く下等の鳥類さへ、猶、天地の大勢に從いて動く、況、高等の人類、之に若かずして可ならんや。故に、吾は、女德は、天稟より發し、女藝は、天職を主とし、女裝は、天然を良とし、人物は、天眞を尊び、生活は、天理に從ふことを述べたりき。特に、男女の關係の如きは、男子は、陽性にして、女子は、陰性なれば、相調合するの自然を離るべからず。然るに、獨怪しむ。西洋女子の、男子に對して不遜を極め、東洋女子の卑屈に失するを、今、其の原因を尋ぬるに、第一、野蠻時代の腕力道理に勝ちし餘風より、嫋々たる女子、猛烈なる男子の

ため、壓制さるゝに至る。第二、封建尙武の餘波より、男子を重じ、女子を輕んじ、遂に、女系より男系を尊び、漸く、男尊女卑の風をなし。第三、智識の偏重に由る。這は、此までの社會は、簡單にして、今日の如く、男子は、外事を勤め、女子は、内事を主とする如く、共に、相待ち相働きて生活する必要を感ぜざりしかば、社會は、殆、男子のみにて、經營し得て、女子は、唯、人口蕃殖にのみ、必要なるものゝ如く見放されしより、男子敎育のみ、必要として、女子の無學を妨なしとなすに始まり、遂に、女子とし云へば、生來、僻見にして、無識なるものと思はる。吁、不幸なるかな。吾は、世人の、未、此の原因を察せずして、女子の敎育を忽にするものは、何の心なる乎を知らず。抑、玉たりとも、磨かざれば、光なき理は、非乎。

反動の、原動に等しきは、眞理なり。女子は、上述の如き原因より、男子に壓制されたりしを以て、今日の西洋さへ、中世期の終り頃、「ナイト」と云ふ一種の武士、多く顯れ、其の目的は、弱を助け、強を挫く義俠にありて、專、女子を敬愛するより、今日の如き、女尊男卑とも云ふべき風俗をなしゝとかや。「マルチン」曰はく、一國婦人の境遇を知らば、其の國の道德、及、政事上の大要を知り得べしと。然れども、是は、少しく、極端に走るなからん乎。吾は、男尊女卑が非なる如く、女尊男卑も、亦、非なりと思ふなり。子思曰はく、天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教。と、苟、人性に背ける極端は、各、教となすに足らず。即、天は、男子の上に、女子を作らず。男子の下に女子を作らず。唯、女子、能く、男子に和すべきのみ。陰陽相待つべきのみ。然れども、一國の

習慣にして、害なきものは、容易に廢すべからず。而して、習慣の、常理に悖らざるものは、是、其の國の道なり。我が國の女子は、太古より、温和にして、能く孝に、能く貞に、而して、人に接するには、謙讓を以てし、自處するには、質素を以てす。且、堪忍もて、家事を勤め、時としては、君に對し、忠義を盡くす等、自、我が瑞穗の國の經典をなすめり。古歌に「あきしまの大和島根をふみそめし神代の道そいまも正しき」とあり。尚、千代萬代の後に至るも、大和心を失ふべからず。而して、此の經典あるを知らざるものは、國を愛する心なきものなり。然れども、一得一失は、天地の常數なり。故に、西洋女子も、我より長ずる所なきにあらず。されば、其の長ずる所に限り、之を採るは、進化の道なれば、徒に、其の善きものをも誹るべからず。唯、日本女子たる心を基礎

として、廣く、智識を、世界に求めよかし。

女權なる言語は、維新前までは、未、我が國になかりしものを、西洋の文化を輸入すると共に、到來したりしものなり。但、西洋とても、「ミル」と云ふ學者が、男女同權論を著し、女子は、政治、及、社交上にも、男子と同等に、權理を分有すべきは、道理なりと唱へたりしより、愈、同權論の氣焰を盛ならしめたりしものなりとかや。元來、無形の理を論ずるに、道理其の本體は、不易なるも、如何せん、之を論ずるものは、信仰を異にし、好嗜を別にする人なるを以て、不變の見界を立つるは難し。故に、吾は、一刀兩斷の姿に、同權論を詳論するを欲せず。這は、本書の目的にあらざればなり。勿論、吾は、女子も、應分の天職を負ひて、此の世に生まれたるものなれば、從ふて、應分の幸榮を受くべき天命を有

つものなりと思へり。決して、不法に、男子より壓抑され、且、物品視さるべきものにあらざるなり。されど、男女の、自然分業を亂し、女子の軟弱なるを以て、男子の强壯なるに當り、競爭するは、不得策なるのみならず、小鳥さへ、雌雄の分限相定まり、雌鳥、巣に在りて、雛を守れば、雄鳥、外に出でゝ、餌を求むされば、女子は、其の體制と、性情とに適ふことのみをするは、造化の本意にあらざる乎、乃、女道にはあらざる乎。蓋、邦家は、男子のみの專有にあらず。女子とても、男子と等しく、邦家と、利害を共にするものなれば、女子と、國家と、絶對に、關係なきものなりと言ふものあらば、非ならん。さればにや、歐米諸國の女子は、議員撰擧をさへ、要求しつゝあるなり。現に、昨年九月にも、「ニユー、ジーランド」の女子は、年齡二十一歳以上に達せば、議員を撰擧し得る

ことを公許されたりしとかや。されど、吾が、其の流行に與せざるものは、日本女子を、無能者と見るがためにあらず。唯、體制、及、性情より、女子の本領内に入るべき業務として、不適當なれば、寧、男子をして、直接に、其の衝に當らしめ、自分は、間接に、意見を述べよかしと考へればなり。誰か、番頭を使ふて、營業する商家の主人を指して、其の、自、業務に携はらざる故に、家財を左右する權理なきといふ乎。女子の政權に於けるも、亦、然り。反りて、斯くするは、女子を敬し、且、愛することに歸せざる乎。之を非なりと云ふものあらば、試みに問はん。女子、婉娩なる身を以て、殺氣紛々たる場裡に狂奔す。何の快味がある。固より、吾も、女子の一人なれば、豈、自、不義の地位に立つことを好まんや。否、吾が、諸孃に勸むる處は、乾燥無味なる法律上の

權義より、遙に優れる快味、無限の道德上にあれば、形式は、政權を顧りみざるものゝ如くなるも、實際は、己が意志を達し得るを欲するなり。松下の禪尼は、自、主義とする節儉の政を、手づから執らざりしも、其の一門をして行はしめたる如き、是なり。況、女子、自、政權を爭ふときは、唯、自個の不得策なるのみならず、娘として、父に背き、妻として、夫に敵する等の椿事なきを期し難きをや。蓋、外國は、固、國情を異にするを以て、或は、斯くするも、大害なきや否やは、知らざれども、若、不幸にして、日本帝國の女子にして、之を學ぶものあらば、直に、瑞穗の國の古道は亂れん。恐れざるべけんや。加之、曩に論じたりし如く、女德を守り、女事を行へば、何ぞ、社交上、權理なきを歎かん。反りて、男子をして、瞠若たらしむるものなり、蘇軾は、有名の學者

にして、決して、凡夫にあらざりしも、其の妻王氏、殊に、賢明なりければ、軾の、外事を果さんため、出づれば、妻、其の詳細を問知し、軾、客と交はれば、妻、必、客の人となりを察して、大に戒しむ杯、公然、夫を掣肘したりしも、軾、反りて、其の忠言に服するを悦びしと。自、妻の墓銘に告白せり。抑、權理は、己か光の反射なれば、價値少なき身分を以て、多く、權理を得んとするは、弓を引かずして、飛鳥を射とめんとするに等し。故に、日本女子は、女德を修めて、女事を果さば、西洋女子に倍する幸榮を得るに至らん。

露霜の降る處、明月の照す處に住む人、誰か、國王の恩を蒙らざらん。故に、人たるものは、必、其の大恩の万分一に報いんため、各自の本分を盡くさゞるべからず。されど、男子は、國防の兵士となり、愛國の策士となり得るも、女子は如

何にして國に報ふべき乎と疑ふものあらん、思ふに、直接國事に鞅掌するのみが、報國と云ふべきものにあらず、言ふも愚ながら、國家は、個人の集合より成るものなりせば、個人、悉、本分を盡くせば、國、自、平ならん。故に裾を褰げて、溪水の涘に、洗濯をなす乙女も、花の都にありて、針業に餘念なき老婆も、其の本分を盡くすものならば、是、報國の一端にあらざることなし。併し、女子も、國民たる本分の如何なる乎と云ふ觀念を抱持するにあらざれば、邦家の隆盛は期し難し、今日の女子、邦家を知るや、否や、亦、人、誰か、父母の恩を受けざらん。殊に、女子は、男子に比すれば、天性軟弱なれば、襁褓の中にある時は格別、穉より、佛者の所謂、嚥苦吐甘の恩、回乾就濕の恩等を蒙り、稍長ずれば、如何なる人に嫁せしむべき乎、旣に嫁すれば、果して、終を

善くし得る乎杯、親の憶念淺からざるべし。赤染衛門の「あらし吹く風はいかにと宮城野のこはぎが上を人のとへかし」と讀みたりし國詩は、能く、親の情を汲みたるものなり。されど、康資王母の「人の子の親になりてぞわが親のおもひはいとゞ思ひしらるゝ」と歌ふたりし國詩の如く、青年は、親恩を感ずる、薄きは、遺憾なり。而して、好し、父母の恩に報いんと欲する者あるも、身を立て、終を善くするにあらざれば能はじ。吾が、以上、章を重ねて、喋々したりし主意も、本分を説き、立身を論じたるに外ならず。嗚呼、國王の恩、山よりも高し。父母の恩、海よりも深し。若し、本書を繙くもの、能く思繹し、必、實行し、報恩の一助ともならば、吾が願、何か、之に過ぎん。(大尾)

史談

夜叉御前

鹽井雨江

あはれ夜叉御前、名のみをきけば、げに鬼ならむか、魔ならむか、恐ろしさは限りもあらず。夜叉ときゝては、人心地も覺えず。さはいへ、其人の心、其人の振舞をきけば、誠に神あらむか、佛ならむか、めでたさは限りもあらず。汚れたる人の世の者とは覺えざるなり。あはれ、世の中には、名は花のごと月のごとめでたきも、心は汚く暗きが習ひなるに、珍らしき夜叉御前、名は夜叉といひて、心はなか〱に、神とはいはまほしきこそ、誠にゆかしく、なつかしく思はるゝなれ。

夜叉御前。父なる人は、源義朝。母なる人は、美濃國青墓といふ宿に、大炊といふ長者ありけるが、そが女にて、延壽といひたる人なり。此の大炊と云ふは、內記大夫行遠といふ者の女にて、源爲義といふ者の妾となりたる人の妹なりといふ。

夜叉御前は、母と共に、常に大炊が家に在りけり。平治の戰ありける時は、僅に十一歳にならせ給ひぬ。都に戰ありときゝ給ひてより、あな父君は戰とか仕給ふとか。

父君はきつくましませば、必ず勝ち給はむが、若しや敵強て、父君負け給はゞ、如何し給はむ。心に懸る事やといひて、都の天をながめて、立つ居つ、やすからぬさまにありけるが、やがて源氏方は破れて、大將も討死やしけむ行方知れず、よき者數多討れしと、早く巷陌にきこゆるを、聽つけ給ひて、何かは堪へむ、母君きゝてか。父上は負け給ひて、おむ行衛も知れずとか。心元なや。のう母上、妾を都に將てゆきてよ。戰ありてふ都へ將てゆきてよ。父君の御行方尋ねてむ。敵といふ者は、情なきものときく、父上かくては都にまします兄上弟御は、いかなる歎きや見給はむ。生捕られて斬られやしたまはむ。はや／＼行きて、將てまゐらむ。のう母上、妾を都へと、母君の袖を引きつ泣つ縋り給へば、母は又更に、翼あらば馳りも行かまほしく思へども、今更に詮なきことを如何にせむ。あはれ姫はさのみ泣給ふことやある。父君は戰に破れ給ふとも、やみ／＼討れ給ふ父にはましまさず。おむ館には、數多の武士もあれば、汝れの兄上も弟御も、恙なく何れへか落ちさせ給ふらむ。武士といふ者、戰は常の覺悟、よしや一度ばかり破れたりとて、さばかり歎きては、武士の家には似つかはしからずと、強くいひて慰さむれど、自からも悲しさは、と

から思ひ直すすべもなく、姫を抱きあげ、抱きしめて、道理ぞやとばかりいひて、よゝと泣き給ひけり。

義朝は。勝ちに乗りたるより、思はず不覚を取りて、あへなく戦やぶれたり。東は父祖より心を寄せし所なり。しばし彼方へ立ち寄りて、後図をはからむとて、嫡子悪源太義平、次男中宮太夫進朝長、三男右兵衛佐頼朝、佐渡式部大輔重成、鎌田政家など、僅に八騎にて、東をさして落ちたりしが、鏡の宿をすぎ、まづ美濃へ出むと思ふに、不破関は、はや敵堅めしときゝて、小関といふ所へ心懸け、小野の宿より落ちゆけど、折りしも十二月二十八日ばかりのことにして、雪降りしきり、風はげしくて、越方も行方も見へず、たどり〳〵て行けば、雪はます〳〵深く、今は馬にては踏むべうもあらねど、皆惜しくあれど、愛馬に別れを告げ、ものゝ具も、しては悪しかりなむとて、鎧も冑も脱ぎ捨てゝ、歩行にて落ちけり。頼朝は、途にて遅れたるが、義朝は漸くに大炊が宿にたどり着ぬき。延寿のよろこび、夜叉御前の嬉しさは、如何ばかりなりけむ。もはや現にては、逢ふ時なしと歎きてありしを、軽我まさず、恙もあらぬありさまは、夢ならずやとばかり延寿はよろこべば、夜叉

御前も、父上悲しかりしぞと取縋りて泣き玉ふ。大炊も心をつくして勞りきこゆれど、義朝も痛くよろこびぬ。夜叉御前を抱きあげて、久しく見ざりしに、大人しうなりしよな。父は戰やぶれて落人となりたり。されど、かくてあれば、事もあらじ、軈て再び兵を集めて、これたびは敵を打ち滅して呉れむに、無念なれど、さな泣きそ。父世に出でなど、軈て迎へむず。去どしなれど、歎げかであれ。母の言にな背きぞ。もし父の武運拙くて、兎も角もならど、父が菩提をこそ忘れねど、懇に敎へ玉へど、夜叉御前は、唯々とばかり涙ながらにいらへ給ひけり。

夫より朝長は、人手にかゝらむよりはと、父の手にかゝりて果て、義朝も危うかりしを、重成がさへぎり戰ひおのれ、義朝なりと名乘りて死したれど、義朝は僅に尾張まで落ち、長田莊司忠宗といふをたよりぬ。げにあさましや、長田忠宗。汚き榮華に眼暗みて、年月恵も唯ならぬ主君を、湯殿にてあへなく殺しぬ。鎌田政家も共に奮闘して、義朝の屍を抱きて死したり。政家の妻は、忠宗の子なりしが、父には似ざる柔しきものなりけり、主君を殺して、身の榮華を願ひ玉ふとは、あさましき父の心哉、汚き業はし玉ふものかな。妾は女なれど、君に二心は如何であらむ。わ

が夫も君と共に果て給ひぬ。余も忠魂義魂は、人には遅れじ、わが夫伴れ玉へや、政家の屍をかき抱きて、ふしまろびしが、夫が殘しゝ刀もて、われと胸をバ貫きてはてたりしこそ、有難き心なりしか。

かくと聞き給ひし夜叉御前の恨は、いふばかりもあらず。物もえいはで、父が遺されし短刀をかひとりて、外の方へ走り出むとするに、母と乳母は、わが兒よ、姫上よ、こはいかにするぞ、何を玉ふと、右左より引き留むれど、夜叉御前は袖を拂ひて、母上、何泣給ふ。乳母も。など妾を止むるや。長田とやら、忠宗とやら、父君を亡くし奉りしかたきをバ討むと思ふぞ。父の仇、恨みでは、此の世を何かはせむ。よしや女子なりとて、幼きとて、父の仇を討に、叶はぬ事あるべき。母上も、先に口惜しとて泣き給ひしにあらずや。乳母も無念と歯がみを爲しゝにあらずや。無念を晴し、恨を返さむと思ふ妾を止むる事やある。あな聽きわけなや乳母、妾がよしなき事いふ時あれど、毎時乳母は、あはれきゝ分けなき事いひ給ふなど、妾をたしなむるにあらずや。夫を覺えてむ、きゝわけなき袖な引きそと、頻りに振り拂ひて、出でむとすれど、母はいかでやらじと取り縋り、賢らいへど、いはけなし。先

つ日父君の寄り玉ひし時、和君に、何といひて行き給ひしや。母のいふ言は、きかでもよけれど許しては行き給ひてかといへば、乳母は姫をかき抱きて、あはれ姫上、父君ともかくもなり給はゝ、菩提を弔ひくれよと、幾度か遺し給ひし事を忘れ給ひてか。父君の仇を返し給はむには、兄上も弟御もましますぞかし。菩提をおさめ玉ふこそ、姫君の御分際にはべらむと、さまざま諭されて、張りつめし矢竹も弱りて、砕けしばかりに泣き沈みて、さはの給へど母上、さはいへど乳母、妾は口惜しきぞ、かなしき事の限りといへども、げにわが女よ、悲しからずやは。姫上よ、口惜しう侍らずやはと、三人りが六つの袖に、しぼりてもつきぬ千筋八千筋の涙雨。床も衣も、草葉ならねど、露茂く、沖の石ならねど、かわく隙なかりけり。

又、頼朝は、はじめ義朝と共に落ちたるが、昨日今日、なれぬ事のみなるに、心ばかりは豪なれど、思ふに任さず、おくれ勝ちなりけるが、ゆく袂もわかぬまで吹きしきるふゞきに隔てられて、遂に父の伴に離れぬ。越方は敵や圍みけむ。行方へはいかなる宿りならむ。雪の光りに、一夜唯一人り心細くたどり〳〵て行きけれど、路に迷ひて小關の方へは出です、小平といふ山寺の麓の里に迷ひ出でぬ。淺井の郡

路の邊といふ所まで落ち行きけるが、今は勞れはてゝ、如何むともせむすべなく、路の邊りに憩らひたりけるを、邂逅老びたる尼の行き過ぎて、いたくあはれがり、己が家に連れ行きて、一月許り懇にかくまひ呉れけるが、雪も稍消えゆけど、賴朝は、幾度か尼の慈悲をよろこびきこえて、別れをつげ、再び小平の路へかゝり、賤の男の、なさけありけるに助けられて、敵の追手を逃れ、女子の姿にやつれて、賤の男に送られて、大炊が宿に賴り行き、しか〳〵と名乘給へど、大炊延壽、わきて夜叉御前の歡びは、いふべかりもあらず。兄上にてましますか、なづかしかりき、父上にも再び遇ひたる心地する。願ふは何處へも行なし玉ひぞ。汝れ行き玉はゝ。あも諸共にいてよ。父上の仇討ちたまふ時は、あもうち連れてよと、まつはりきこえ玉ひけり。

靑墓の大炊の家には、賴朝のかくまひあるよし、いつしか泄れきこえけれど、宗淸といふ者、巳れ許し置くべきものならじと、俄に大炊が館に押し寄せて、是非に落人を出せと罵しりて、家の人々の說かむずるをきゝもやらで、我意に踏込みて、賴朝が自害せむとするひまもなく、慈悲と云ふもの絕えて知らぬあらくれ男ども、荒

き繩もて縛り上げ、引きもて行かむとすれば、夜叉御前は、あなやと計り取縋りて、掃へど離れず、わか兄上に、何の罪がまします。何にしに罪なきものを、なさけなくも縛め給ふ。其繩き解てよ、兄上を許してよ。是非に兄上を將てゆかむとならば、此の夜叉をも、諸共に將て行けや。兄上も義朝の子なれど、妾も義朝の女ぞ。義朝の子ゆへとあれど、女子なりとて、逃るゝすべもなし、迚も消えむ命ならど、おなじ草葉の露とならむ。同じ刄の錆とならむ、さすれど消ねなむ後にも甲斐あらむ。是非に妾も共にと、兄のいましめの繩を取りたるまゝ、引けど掃へど放たず。兵卒共も困じ果てしが、猶豫すべきにあらねば、兄は京よりの指圖ぞ。そちの事は後に沙汰あらむ、やうあき妨げなせそと罵りて、強て引き放ち、頼朝を將て行きぬ。夜叉御前は、猶も泣すがりて、呼び立つれど、無情の人獸は、人の形あれど、人の心は無きものなり。あはれといふ事え聽かぬ知らねど、夜叉御前の呼ぶ聲も、耳にも入れず、荒々しげに頼朝を引き立て出でけり。

夜叉御前は、無慘口惜しやと一聲、簀子にうち仆れて死したるごとし。さま／＼に慰さむれども、喉さめ／＼と歎くのみにて、物もえいはず、只歎にのみ埋れて、胸

も心も盡りはてけむ、湯だにえ呑ず。父上は尾張にて討れ、義平主は京にて梟され、朝長主も、はや空しくなり給ひて、今又頼朝の君まで擒れ給ひて、けふあすを知らず。思へバわが家の一本、幹も枯れ、枝も折れたるものを、葉バかり何にゝ存命へむ。何を便りて殘らむや。源の迹もすむべくもあらぬ此の濁り世に、なまなり存命へて憂き耻を見る事あらで、昔より淸き源の流れを汚すなり。父上も懷かし。兄上たちもいとほし。此の世はさびしとてかり歎き歎けバ、大炊も延壽も、せむすべを知らず、唯如何やうに歎き玉ふとも、返らぬ事は、繰返すもせむなき歎きなり。兎にも角にも御命存命へてこそ、父上はじめ兄君たちの御菩提を弔ひ給ふべけれとてかり云ひて慰むれバ、やゝ思ひわき給ひてか、折りふしは歎の雲もかき亂れず、御袖の露も輕るげに見えけれど、大炊も延壽も、いたく歡びて、かくてはよしなき事もなからむと、心ゆるみて、あまりつきまつはらず、乳母の女房も、やゝ油斷したりけり。

夜叉御前は、思へバ、何時何處敵に情のあるべき。潔ぎよからぬ命を存命むとして、人の手に見苦しき最期を遂ぐる事あらで、あるはあさましき憂き洲に沈むことあら

も、我が耻なり、家の耻なり、わが武門の耻なりと思ふ心の一筋に、少女ながらも、手束弓、ゆづるのつるの、ゆるぶかたなき心根に、深く思ひ究めけむ、二月の十一日といふ夜、唯一人り窃に青墓の宿りを出でゝ、邊り離れたる杭瀬川といふ淵に、身を沈めて果てにしこそあはれなりしか。

あはれ夜叉御前、名を聞けど鬼を凌げど、心を聞けど、誠に天女に耻ず、親を慕ひ同胞を思ひ、名を惜しみ、家を思ひて、僅に十一歳の少女ながらに究めたる覺悟。誠に昔の大人にも多くは聞かず、ましてや今の世の浮草の根なし少女たち、いかでか係る覺悟をよくせむ。あはれ今様の女子たち、名は鬼にても蛇にても、はた獸にてもよし、心こそ誠の人心地でこそあらまほしけれ。

表は荒栲の袖にやつすとも、心をこそ飾にあらまほしけれ。徒らにうはべをのみ飾りて、心の穢きは、あさましき限なり。さらば少女たちは、此の夜叉御前の物語りをきゝて、はやく改めて、誠のやまとの少女にならまほしけれ。

澤橋兵太夫の母の事

蒲城　弘

徳川氏治世の中には、忠義孝節の行ひあるものいと多く聞えたるも、もと、其の節義を勵ましたる政のしるしとやいふべき。其の中にも、この澤橋か母のことなどは、最も其の初つ方のことにて、慶長の古き昔の事なりき。この事、室鳩巣翁の駿臺雜話に、細しく見えたれど、こを拔き出でゝ掲げつ。そも、婦人の身として、よくも義理を察し、ことに、辛苦を忍びて主君の爲にすることの篤きこと信になみ〳〵の行ひにはあらずかし。こはまことに、世の人には愛でたき鏡ともなるべきことにこそ。みん人その心してよ。

加賀の前田家より、毎年八丈島の浮田家子孫のもとへ、資用のために、小金幾星、丹藥幾包、其の外瑣細の物件、定數ありて目錄の如く、公の官吏に付して、八丈が島へ奉せしむ、翁加賀にありし時、其のいはれを故老に問ひしに、澤橋兵太夫といふ者より起りたる事なり、豊臣太閤の時、前田家の先祖大納言利家の女を、太閤養女として、浮田秀家に嫁す、是秀家の夫人なり、然るに慶長年中、關ヶ原師散して後、秀家は石田方の渠魁たれバ、死罪に處せらるべかりしを、島津家の乞哀によりて、

死一等を減じて、秀家幷に其の子八郎、八丈が島へ竄逐せらる、八郎に乳母ありけるが、是はとくに逃去ぬ、其の介の女房俗にざしと云ふ八郎が幼にして、乳母に離れて遙遙島に赴くをふかく泣悲み、徒跣にて官廳に詣りて、しきりに八郎につきて島に到らんと願ひけれども、制禁ありし程に、是をゆるさず、女房、「此の上はなにの爲にいきてあらむ」とて、すでに自殺せんとするを官吏おさへて、さて議しけるは、「此の女房を目前にて見殺しなば、後に上にきこえん時、不便におぼしめして、など窺はざりしと、もし御とがめもありなんか、只窺ひ奉りて、御旨にまかするにしくはなし」とて窺ひけれど、「女なれどくるしかるまじ、島へつかはし候へ」と、命下りしかば、女房限なくよろこびて、秀家父子につきて島へ赴きけり、其の時三歳になりし子を抱き、浮田家の夫人の許へ來て、「自は八郎御曹子の御事、餘りいたはしく候へば、御供申候ひて島へ參り候ふ、此の御奉公を忘れおはしまさずば、此の子を御側の人へ仰付られ、御そだてさせ、人になして給り候へ」といひすてゝさりぬ、夫人其の子を常に膝下に置きて撫育し、「此の子が母は、身をすてゝ我が子八郎が先途を見届くる者なれど、此の子をばわが子とおもふべし」とて、所生のごとくせられしとな

り、其の子の父はいかなる者にかありけん、知らず、氏は澤橋にてぞありける、夫人後には加賀に到りて、前田家に依りておはせしが、秀家備前の國主たりしより、加賀國人夫人を稱して備前君とす、今に其の墓加賀にあり、夫人在世の時、澤橋氏が事成長して、仕べき程になりしかど、前田家へ召仕はるゝやうに、ふかく付託せられしかど、彼の家にて所領給りて、澤橋兵太夫何がしと名乘るが、たゞ明暮母の事をのみ思ひて、涙をおとしけり、いく程なく遁世の願あるよしにて、國をさり形をかへて僧となりて、いづかたにありとも行へ知れざりけるに、元和のころにかありけん、將軍家御上洛ありて、二條の御城へ入せらるゝ時、ひとりの僧御駕輿ちかく訴狀を捧げゝるを、御供の中より抑へけれども、きかざりける程に、討ちすてんとしけるを、御輿の内より御覽ありて、「沙門を、聊爾なる事いたし候ふな、訴狀うけ取候ひて、御跡より召連れて參り候へ」と、御直に上意あり、さてもと前田肥前守家來のよし申すによりて、前田大和守、御上洛の御供にてありしに御預ありて、後程なく江戸へ御歸城ありしかど、大和守召具して江戸へ下りぬ、其の訴狀の趣は、某三歳の時、母に汇候ふもの、主家の爲に八丈島へ罷越して候ふ、母を島にさし置

き、其の子として跡に殘り居候ひては、いきてあるべうも覺えず候ふ、御慈悲に、母と一所に島へつかはされ下され候へとの事になんあるける、官吏上の御旨を奉りて、思ひとまるやうに再三寛喩ありけれども、御うけ合申さず、所詮思ひ切たる容色なく、上にも其の志を不便におぼしめさるゝにや、かさねて仰出でたるは、「島へつかはさるゝ事は、御大法においてならせられぬ事なり、島より母をめし返さるべし、島より歸るやうに、文にて申こし候へ」とありけれど、兵太夫申すやう、「有難き御事に候ふ、たとひ申しこし候ひても、母中々承引仕るまじく候ふ、されども仰出されにて候ふまゝ、申しこし候はん」とて、文かきてつかはしけるが、兵太夫申す如く、母島にて其のふみを見て、大きに腹たちて、「我汝が三歳の時、御主の先途を見屆けんとて、上へ願ひ奉りて、一度こゝへ來りしものが、今汝を見んとて、御主をすてゝ、再歸るべき樣やある、いと口惜しき事を聞く者かな、重ねて申し越し候はど、返答にも及ぶまじ」と言越しけり、官吏兵太夫を公廳にめしよせて、是程に仰出されてかなはねど、上にもなさるべき樣無し、其のかはりには、外に願奉りたき事あらば、御かなへ下さるべき由言渡しけれど、兵太夫畏りて、卑賤の身として、上

を憚り奉らず、所存を申上候ふに、重く御取あげありて、是君にまで仰出され候ふに、此の上に私の所存をたて申すべきにも候はず、但し一つ願奉り度事こそ候へ、前田家は浮田と由緒ある事にて候へど、彼の家より、毎歳助成の金、幷に入用のもの承り候ひて、永代嶋へ差越し候ふ樣に、公命下り候はゞ、限なき御恩澤にて候ふべし、然らむ母も悅び申すにてあるべく候ふ、某母への孝行、此の一つにて候ふ、外に願奉るべき事はなく候」と、申上げければ、其の事下して議せられけるに、是は苦しかるまじき事なり、されど、金も員數多くはなり難し、其の外の物も、品によりてならぬ物もあるべし、所詮僉議して、其の員數其の物品を極めて、前田家より定の如くしたゝめて官へ付し、官にて其の物件を點撿し、嶋へ送り屆くる事になりたり、此の事四方へ聞えしかば、列侯の家より爭て徵辟せしかども、兵太夫、「我此の後仕官の所存なし、但加賀の家は、舊君の事なれど、是は辭すべからず」とて、加賀へ歸參しけるが、程なく病死し、子なくして家絶にけり、翁古今を考るに、母子互に忠孝の道を盡したる事、是に類すべきはなし、一奇事といふべし、況んや匹夫をもて幕下を動し奉りし事、至誠の致す所とも申すべし、然るに此程の事を、加賀に

にさへ、今は沙汰する人も稀なれど、其の名世にあらはれずして埋るゝこそ、口惜しく候へ、さて幕下の御仁政は、勿論の事ぞかし、よく下情を御察し、卑賤の義を御そだてなされしは、誠に有がたき御事なり、御祖訓のごとく、國家の元氣を養はるゝ思召にてもあらんか、淺智短慮の及ぶべきにあらず、

家政

看護法捷徑（三十三）

三笠舍主人

第四編　常に多き病の心得方（つゞき）

（六）咽喉炎

一咽喉炎とは、飲食の嚥下に當りて、咽頭に一種の痛を覺へる症にして、口内を窺へば、軟口蓋、赤色を呈し、懸擁垂腫れて大と爲り、扁桃腺咽頭の兩側にありて、梅肉狀を爲すもの、）腫脹するを見るべし。又患者は、言語に鼻聲を帶ぶ。

二此症に罹りしものも、亦十分發汗法を行ひ、明礬水、（分量前に出）又は鹽酸加里水、

（分量明礬水に同し）を、頻々含嗽せしめ、兼て、頸回の冷水纏法を行ふべし。

三咽喉炎は、間々實布的里亞に轉ずる事有、故に、前の方法を行ひて後は、速に醫の診を乞ふべし。

四俗に「ノドケ」と稱するは、此咽喉炎、實布的里亞、格呂布、（馬脾風）等の總稱なれども、咽喉炎は、通常は危險の病に非らず。次の二症は、恐るべき傳染性の病なれば、前に擧る咽喉の症狀を發する時は、（最初は、三病共に、殆、一樣の症狀を顯はすものにて、甚看過し易し、速に醫の診を乞ふを肝要とす。

（七）喀血

一喀血とは、呼吸道、特に氣管、又は肺臟より、鮮紅にして、泡沫を含みたる、流動性の血液を、喀血するものを云。（凝固たるものは、喀血と云はず）多くば、咳に沿て起るも、時として咳なく、卒然として來り、或は一時に多量を喀出し、或は多少の喀血、數回反復して、興る事有。

二喀血の來る前には、通例胸の深部に、一種物の充滿して、壓迫せらるゝが如き感覺と、温暖とを覺え、呼吸窘迫、心機亢進し、次で喉頭に、一種の灼熱と、瘙痒

とを覺ゆ。此時、早く咯血の前兆たるべき事を察して、速かに相當の處置を施す時は、大に病勢を挫き得るもの也。則、咯血の前兆たるべき事を、察知せし時は、速に次の處置を爲すべし。

三　先づ患者の衣服を緩るめ、少し上身を高くして、靜臥せしめ、胸部の服を開きて、十分に胸部の冷水罨法を行ひ、或は直に冷水を注ぐも可なり。次て、濃厚なる食鹽水を、（食鹽に少しの水を加へる位にて宜し、）飲用せしむべし。或は、沸騰散一二包を、服せしむるも可也。此くして、患者は極めて安靜にして、少しも動搖せしめず。又嚴に言語を禁ずべし。

四　右の處置を爲したる後、若くは、爲すと同時に、速に醫に報告して、診を乞ふべし、特に咯血大量なる時は、速に醫の診を乞ふべし、

五　止血せし後と雖、極めて身體を安靜にし、務めて言語を避け、醫の命あるに非ざれば、決して、起臥、動搖、等を爲さしむべからず、

（八）　吐血

一　吐血とは、食道、又は胃より、血液を吐出するを云ふ、其血は、暗色、稀れには黑

褐色にして、泡沫なく、多くは凝りて流動せず。

二此症も亦、發する前、心窩より胸に亘りて、一種充滿の感覺、及噯氣を催し、尋で吐血す、此症に於ても、亦上半身を少し高くして、蓐中に靜臥せしめ、心窩に冷罨法を施し、兼て氷水、若くは、氷片を、少し宛、頻回嚥下さしむべし。溫湯、其他の食物は一切禁ずべし。

三其他の處置は、畧咯血に同じ。

漫錄

あうむ文學

楢の舍主人森馬太

○學問

學問は、快樂を增し、裝飾となり、才能をひらきなど、種々の効能ある也。今更ことを新しげに述べ立つるに及ばず。（學問の要旨は、これらを以て最となすにはあらず）、人、これによりて閑居の快樂を得、これによりて談話を巧になすを得、これによりて、すべての事件を判斷し、且其を整頓することを得。或は曰はん、事件を判斷し、且其をは

く成し行ふは、經驗に富みたる人の力にて足れり、特に學問といふを用ゐむや。然り、然り、誠に然り。されど、經驗家は、格段の事件を處理するに止まり、一般のもくろみ、とゝのへに至りては、到底學者と相並ぶこと能はざるべきなり。如何に快樂のためなればとて、日夜讀書にのみ耽らむや、精神なえ衰へて、果は惰性を進むるに至るべからむ。如何に裝飾のためなればとて、これを過度に應用して、徒に耳を驚かさむとするは、世にいはゆるなまいきとや言ふべからむ、味噌の味噌くさきは、誰にも愛せられざるべし。蒔繪の賞すべきは、その金銀箔あるがためならざるなり。又、これによりて、天下一切の事件を判斷し、且整頓せむとするは、學者の常弊なり。一にも法則、二にも法則、われ、これを何に學びぬ。さては法則に違はむ、かくあるべきなり。かくては錯あるまじ。彼れに照らし見なむ。嗚呼〳〵、學問、汝は常に迂儒の束縛に窘めるにあらずや。

學問は能力を完全するものにして、また經驗によりて完全せらるゝものなり。けだし、天稟の能力は、なほ植物のごときものなれば、學問によりて發達增進して、遂には完全圓滿の域にも至るべきなり。されど、たゞに學問の撫育をのみ仰ぎたらむには、大にその發達增進をあやまり、漠然として歸順するところを失ふべからむ。苟、完全圓滿の域を望む、こゝに於てか、經驗といへる羅鍼の大功德を藉らざるべからず。實地家の、學問に對するや、これを侮りこれを賤しみ、以て無用の

長物となす。無學の徒は、これを驚きこれを尊び、以て神明の不可思議にして、窺ひ知ること能はざるが如くす。ひとり賢才の人にありては、事物觀察の明あるがために、超然として高く學問の上に立ち、絶えてこれが撿束をうけず、自由にこれを運用することを得べし。何となれば、學問は自らその効用を敎ふるものにあらざればなり。われら書を讀むは、他説を駁せんがためにあらず。また、論説談話の材料をあつめむがためにあらず。汗牛充棟の書籍、その目錄を知らむこと、決して容易ならず。されど、その中、玩味咀嚼して以て己の滋養を益すべきものは、その幾何かあらむ、或は、試にこれを嘗めば足りなむ。或は、これを呑み込まで足りなむ。即、或書籍は、單にその一部を看過せばよろしかるべく、或書籍は、只すらすらと讀みとばさもよろしかるべく、特に潜心注意して全篇を反覆するの價あるものは、讀者よろしくなほざりに看過すべからず。或はまた、他人の談を聞くのみにて、自ら繙かずともよきも有らむ。拔抄は、あまり高尚ならざるもの、多く有用ならざるものに限りて、なすべきの便法なりといへど第一種のものに至りては、一部の拔抄を以て大益を收めむこと、到底期し得べからず。けだし、拔抄は、なほ蒸溜水にひとしく、極めて無味淡泊のものなればなり

夫れ、人は、讀書によりて完全になるべく、會話によりて敏捷となるべく、記錄によりて精密となるべし。この故に、もし記錄するを好まざる人は、

必大記臆力を要すべく、常に會話せざるものは、非常の頓智なくてはかなふまじく、讀書を好まざるものは、知らざるを知れりとするの、狡智を具なへたるものに多かるべし。

歴史は、人を聰明にし、詩歌は、人を鋭敏にし、數學は、緻密ならしめ、哲學は、深遠ならしめ、道徳は、謹直ならしめ。論理と脩辭とは、談話論辨に巧ならしむ。打球は、腎臓に効あり、射放は肺と胸とに、徐歩は胃に、乘馬は腦に、皆各々身體に大効を奏するにひとしく、人心種々の沮塞は、適當の學問によりて、治療疏通せらるべきは、固よりその所なり。されば、精神散逸して、靜ならざるものは、まさに算數學を學ぶべし。何となれば、もし算數にあたりて、精神靜ならざれば、決して正しく證明すること能はざればなり。是非を別ち、異同を明にすること能はざるものは、まさに哲學を研究すべし、何となれば、哲學の力は、よく毛髪を分折するに足ればなり、その他人心の缺點は、實に特種の藥方たる學問を待ちて、完全圓滿に救治せらるべきものなること、毫も疑を容るべからず。

あらずもの哉

鹽井雨江

一、女子の才學めかしたる事

女子の才學めかして、もの事にさし出でたる、わきて若き女子の、物知り顔に、口ふくらかして、あれはしか〳〵、これはかく〳〵など論ひたる、

あらずもかなと思はるゝなり。いな、思はるゝにあらず、必ずあらずもの事なり。女子は、心小くて、物事に動き易し、されど、笑ふ事も女子に多く、泣く事も女子に多し、もと心胸の挾きが故なり。

心挾きが故に、わけなき事に滿心し易し。大學を一冊讀めば、大漢學者のごとく心得て、人に對へば子曰くといふ顔を爲し。あるは、僅に三十一文字の和歌を綴れど、六十餘州の秋津島根の第一の歌人學者と心得て、人だに見れど、やまとうたはといはまほしき容貌して、もの云ひたる、なかなかに心はあらず。あるは、僅にナショナルの讀本を讀み終れば、はや歐州全國をも、まるのみに爲したるやう心得て、猫のうなるを聞きても、抑も西洋にては、キャットはニューと鳴くなりなど論ひて、束髪を振り立つるが多し。見苦く、面憎く、誠にあらずもがななり。女子は、姿に振舞に心に、飽まで柔和しきが、めでたくあはれなり。知りたる事も、知らぬさまして、恥づかしげに扣へたるが、ことなくあはれのものなり、

おのれ、先つ頃、ある國學先生の歌の會へ招かれたり。おのれは、歌といふもの、よくは知らねど、いかなるものや、後々の爲め、名人の歌よむ氣色も、習ひ置むと思ひて行きぬ。聚りしは、皆先生の高弟にましまする人々にて、男兒も數多寄り集ひ、女子も四人ばかり、おなじ席に連りたり。皆、堪能とか、名人とか、世にも許されてならむか。自らは許したる人々なれば、柿本の歌はいかに、

貫之の歌は如何になどあげつらふさま、誠にいみじき歌人なりけり。四人りの女子の中にも、三人りはわきて堪能の人と見えて、しか〴〵の歌は、万葉集の何の巻に、誰れの歌なり、かく〳〵いふは、貫之の歌なれど、歌の中の屑なり。衣はすてふにはあらず、衣はしたりが古きなりなど、のゝしるさま、男子をも凌ぐたかりなりけり。如何計り天晴の歌人なりけむ、おのれは、あなやと計り驚愕の外なかりき。又、一人りの令嬢は、あまりに歌は堪能にあらずにや、席の隅の方にひき退りて、首もえもたげず、かしこまりてのみおはしたり。軈て、互に歌を詠みて、書記の書くまゝ、讀みきこゆれば、三人りの女子は、人の歌讀む毎に、あなふるし、あな面白からず、そは何の集の、誰の歌なり、しか〴〵いふ古歌を盗みしなど、うち笑ひうち罵りて、人なきがごとく、隅なる令嬢は、え讀みあはず、さゝやかに書きしるして、書記の許へさし出だし、又、恥かしげに身をすさりておはしけり。軈て、撰者も來りぬ。書記は書きたる歌を、片端しより讀みあげぬ。撰者は彼是ときゝ終りて、いで〳〵とて、其歌の秀逸を撰びけり。秀逸の歌は、誰のなりけむ、三人りの名人の歌なりしか。いな〳〵、いかで、思はざりけり、隅なる令嬢の歌、最高點なりけり。

大かた、かゝるものなり、なま才學めかしたる者は、なか〳〵に心の中は拙し。おのれ、なむどう心地よく思ひぬ。隅なりける令嬢の歌、十度ばかり高らかに讀みあげて、あはれ歌もやさしく清ら

なるかな。誠に女子の徳も見えてといひて、三人りの女子を見かへりたれど、おのれの歌の拙きも知らで、なほ他人の歌を、とやかくと論ひて、口をとがらして言るさま、面憎く、心地あしうおぼえぬ。もし此の三人の女子なら、わが妹にてあらば、踏み躙りてもくれむばかりに思ひぬ。

あはれ、世の中の令孃たち、此の隅なりける令孃こそ、誠に女子の德の美しき人なれ。三人りの令孃の如き、才學めかして、男子を詈しり、古人を論ひて、四邊に人なきがごとく、まかも心は拙くありては、見にくきのみにはあらず、さる者は女子の德も無く、女子にはあらぬあやしきものなり。わかき令孃方の謹み給ふ事になむ　（未完）

沖繩縣下旅行日記　（八）

まに〱庵主人

廿七日、今朝は、心地も例のごとくなりぬ。晝近くまで番所の人々とはなしゝたり。このごろは、學校費の割賦よて、いそがしき由、心なし奴が、さてはなしは、大方内地にかゝることとなりき。その人のはなしよれど、笹森君は、先月中旬、このわたり巡回せられしとのこと、そなたのことには、かしこく、覺あることとなり。未開の人々の、最も恐怖るゝ、人爵の貴き人々よりの心添もありとのことなれば、いかなることをか見つけ給ひけむ、聞きあつめ給ひけむと、いとゆかし。晝餉のせはしくるゝ人にたのみて、芋粥を食ふ、味いとよし。四時ごろより、萬坐毛にゆく、こゝは、む

かし藩主何某、まだそのころは、國王など稱へし、この地に來りて、萬人をも坐せしむべしといひしとかにて、萬坐毛と名づけたりと、ことに、名高きところなり。但し、殘波岬見し目には、崖の高サも餘程ひきく、ながめも大方かはらざるに、ひろさは、かれの五六分が一ほどなれど、所せくおぼえき。波うちぎはを瞰おろしゝに、魚さへ例の緑色なり。

聞きてよし見てはつまらぬ名所かな

など、こそつぶやかれしが、さても、わが僻心が、萬坐毛にゆきて、昔をなどいみじきをこなるべし。かへるさ松林にて、鳩のなく聲聞えき傍の人にわれには、ハトッポッゝゝと聞ゆるが、如何に聞ゆるぞと、問ひ、試しに、コッコテイーチテイッチと聞ゆと答へぬ。難波の葦も、既に、いひ舊したりや。この人の物のねと聞きて、いといみじう悲しと聞きつるは、青鳩と呼ぶるゝものゝ音なりと。その聲をまねび聞せしが、馴れぬ耳には、オゝと長くひきて、あげさげする、さながら、托鉢坊主の、財寳ありげに見ゆる家にゆきわたり、ことさらに、拵へてうちだし、却りてそこねたらむやうにぞ聞かれて。今宵は、月圓滿なり。蚊の聲のかまびしかれば、門前の松の下に出でゝ、そゞろありきしけり。折ふし、十一二ばかりの童、笠うち着、手に尺ばかりの魚二尾を蔓やうのものに、つらぬきて、提げ來れり。それ買うて給ふれといふ聲さへ、露にぬめりたり。買ひとりて、夕飯の料にとたのみつ。あはれ、うれしげに、いそ〳〵走り歸れり。

刺身にせしとてもち出でぬ。われらが國の、山家にて食ひたらむ心地せらる。さて、何ぞの魚ぞと聞きけるに、青魚とて、今日も見し緑いろ濃き魚なり。人のおりたゝれぬ水の中に、千歳の色見せて遊び居たりしものを、その折に、かくなるべしとは思ひかけゝむや。

今宵の月も、明日の夜や虧げて、　松のみつれなくその色をたもたむ、　この魚元來いろ松にもすぎたり、　古人あざむかす、盈ちたるは虧く、

飯は例のごとくなり。夜のもとかたくたのみつるを、明日の朝は必ず、又、芋粥にしてよなどうちかこつ。あなたの森には、何うかれてか、三味にうちつれて、どよめく聲かしましきまで聞えき。

廿八日、朝の芋粥を名殘にて、恩納をいでたつ。道は、又、例の如く、砂原ならざれば、岩坂なり。昨夜屋良のうらみを報はれてか、眼のわたりはたくさゝれ、快からず。安富祖村にいたる。村役人なるべし。四五人集り居たり。さはぎのゝしりて、茶などすゝむ。イン瀧は、いづかたにて候ふかと問ひけるに、御撿分におはせしぞ、それ御どもと下知せられて、いざさせ給へ、この道にとて年若き一人は既に庭にとびおる。公の巡回と思ひたがひしにや、いとはしきことかな、いやとよ、私のといへど、ひとすぢに、さることゝ思ひ定めけむ、かたはしも聞かず、はやいでたつ、さもあらばあれ、折角こゝまで來しもの、先づゆきて見むと、後に立たがふ。瀧は、村より十二三町

南の方新城山といふにあり。上の方見ゆるところ、一丈ばかりは、岩のくぼみを、あなたこなたを、もとめ下る、一目少しさしいでたる岩の陰にたまり、さて、瀧つぼにおつるなり。その長サ大凡三丈、或は、雲の柱とも見るべく、或は、布をひけりともまがふべし。そのはて、岩にあたりて、又霧ともなり、霞ともなる。瀧つぼの正面即ち、霧霞のうちには、つぼ前栽にて見たらむやうなる、めでたき岩の山にて、土の山をさゝへたり。瀧つぼも、深からず、濶からず、所にかなひて、いとめでたく、おろそかならむ、畫師のたくみにこそ、得出來じ、まして、われらが筆をや、かけても及ばぬことになむ。明治十八年に出板せし、沖繩縣地誌略には、安富祖村ノ山中ニ瀑布アリ、

高サ一丈ニ過キズシテ闊一丈五尺アリと、見えたり。こゝ八年の中に、いみじうかはりはてたるものかな、これを思へば、昨日の洲は今日の瀬も中中おろかなり。さてこの瀧をイン瀧といひもし、書きもするが、若しはヰン瀧を聞きひがめ、書きすがめたるにて、畫の瀧にはあらぬか、この縣の詞ぶり、總べて、第四韻の音を殆ど、第二韻の如く發音し、又奈麻二行ノ音は詞の第二音以下に在る時ンと音便にすること多し。されば、エノタキを、ヰンタキといふまじきものにもあらじなど、折から、ふと思ひけるまゝを、村屋に歸りし時は、十二時すぎなりけり。名嘉眞村までは、餘程の道あり。こなたにて、晝食めさせ給へ、御持參ありやと問ふに、もたらぬよし答へたれば、糯米

買ひ來などの丶しる、こなたは、糯米を常食とするにやと思ひしに、猶、芋なり。内地のものは、到底、こなたの、米芋など食ひあへぬもの丶やうに思ひて、かくいひけるなりしと。内地の同胞の中には、芋だにもと、かねて子を中にもすゑおき、終日唯泣きくらすものもあるぞかし。異の御役人様方とて、御宿元にいらせらる丶折は、土地米は、淡泊にて身體によし、稀には、蕃藷もうまし、などの給ひて、食ひ給ふめり。何の御出張せられたればとて、然にはかに、嗜好のかはるものかさるにても、いかなるものにか、不便なるものかな。われらの如く貧しき農家に育ちしものは、さる不自由もなかりけり。強ひて請ひて、芋を食ふ、ラツキヨ添へてもて來ぬ、箸は、例の竹の枝なりき、種々の料にとて、錢少し出したれど、四錢ゆくさきの人夫の賃にとて取り、餘りはうけず。強ひつけたれど、さらば、芋の料として、一錢頂戴すべし、灘への案内賃などとは、思ひもよらぬこととて、遂に返しき。この村にも、中古までは、綱引ありし由なれど、今は、すたり、唯、舊八月十十一兩日に、豐稔の御願として、二才念佛(壯者踊)を行ふ、首里那覇にての、芝居のごときものなりといへりき。名嘉眞村々屋にて、人夫をさしかふ。こ丶に、藁を蜈蚣を半にさきたらむやうに、編みたるを、木の枝をけづりて、ものさしやうに、ひし／＼と、丶○など書きつけられたるとあり。駐在巡回某氏につきて、聞きたるに、木の枝は、村屋葺替の葺割の符にて、一は、上納物

の割符なりと、ヽ＝は一の數をあらはし、フ＝若しくはへ＝は、五の數を、○＝は百を表す、十の數には十＝、即ち、千の字を用ゐる、又、百を十合せしもの、即ち、千には、⊕＝を用ゐるといふ。藁を編みたる方は、さきを結びたるは、五十文即ち、一厘、結ばずして、それより少し短かきは、百文結びたると、大方同じ丈なるは、一貫文、これと同じ長にて、二本よりあはせたるは、十貫文を表す。さて、こゝより、連れたる人夫は。十三四ばかりの少年なりけり、今宵の中に、必ず、名護まで、ゆきて歸り來むなどいひ殘して、先にたつ、里程三里よは餘れりと、實に、さる心にやあらむ、ひた急ぎにいそぐ、時も早や、五時を過ぎたり。歸路のほども、いとはしければ、見も聞きもせずと、許由までゆきぬ。

湖平底の橋うち渡るころは、夕日はなやかに映じて、あたりのけしきも、いとまばゆし。やがて、日もくれぬべし、よしこゝより歸れとて、夫をさしかふ、この度は、耳の聞えぬ老人なり。話すことのかなはねどにや、足いとはやく、八時すぎ、名護に着きけり。番所はいづくで、この村の中かなど問へど、いかで答のあらむ、息せきて、やがてこゝなりといふに、入りて見れば、名護高等小學校なり。寄宿せる生徒にあひて、聞けど、番所はまかゞのところにて、四五町がほど前にすぎたりと、力なくも、前にたちて、番所にたどり着きたるは九時近くなり。萬のこと、うちおきて、直に、寢につきぬ

（つゞく）

しきしまのやまとの
くにに人ふたり
ありとしもはゞ何かなげかん
（萬葉集）

道のしをり歌あはせ（七）

久志本常幸寄贈

あし洩の山かきくもりしぐるれど
紅葉はいとゞてりまさりけり

しはかぜにあら磯浪のいくかへり
砕けてもまたいはにかゝらむ

道の大すぢをふみしめて、たしかに立たること丶ろざしは、百たびくじかれてもたゆます、忠誠義烈のゆゝしきさま、いはゆる、風をきゝても興起べきものなり。

もの丶ふの矢なみ繕ふ籠手の上に
あられたばしる奈須のしの原

こまとめて袖うちはらふ影もなし
佐野のわたりの雪のゆふぐれ

もの丶ふの身は、やすらかに衽のうへにふしながらも、心に此境をわするまじきものなるべし。常に、こゝらの歌をうち誦じなど、金革を衽にするの志を感じて、勇氣を進むべきとぞ思ふと、鳩巣室直清いへり。

命をばかろきになしてもの丶ふの
みちよりおもき道あらめやも

命やはうき名にかへん世のなかに
ながらへはつる習ひありとも

世に、人の命をかりをしきものはあらじ。しか

るに、そのいのちにかへても、うしなふまじきものは、さふらひの節義にぞありける。義は、泰山よりおもく、命は、鴻毛よりかろし。人は、一代かりそめながら、名は、末代にのこるものなれバ、たとひ、身はひしびしはになるとも、たゞ、なき跡の名こそおしけれ。もし、うしろぎたなく、いのちをしみて、さふらひの死ぬべき場をはづしなば、何の顔ありてか、世にありへなん。まことに、義のおもく、名のをしむべき、なに物か此上あらん、もの丶ふのもの丶ふたるゆゑは、ひとへに、この、覺悟にぞあなる、

ふして思ひ起て數ふるよろず代は
　神ぞまもるらんわがきみのため
山はさけ海はあせなん世なりとも
　君にふたごゝろ我あらめやも

人の臣たるもの、誰しも、かくあらまほし。

吾がため祝ふこゝろのふかければ
　ひじりの御代の跡ならへとぞ
君をいはふこゝろの底を尋ぬれば
　まづしき民をなづるなりけり

はじめの歌は、後京極攝政殿、天暦のみかど、いまだ、皇太子にておはしまししとき、御本たてまつりて、ものまねひし玉んことをすゝめられし、御いさめの詞なり。元老大臣たらんもの丶、家國のために、心を用うること、かくぞあるべき。もろこし、唐の代に、仇子良といへる姦臣ありけり。身老て退くとて、あと役のものにをしへけるは、とかく、上には、

さま〴〵のなぐさみごとをすゝめて、遊樂にいとまなからしめよ、もし、儒者などを近づけ、學問し給ひて、前代治亂のことわりをしろしめさば、我輩、かくてあることを得がたからんと、いひし。されど、人に君としては、かならず、ものまなびし給はではあるべからざること、是をもてかゞみるべし。今川了俊の家訓に、學問なくては政道成べからずと、示されけるは、いと〳〵めでたし。後のうたは、仁政をもて、民をはぐゝみて、國の本を厚くし給ふこと、君德の第一にして、國運の榮ゆく基なれど、ひたすら、君のために、是をなんこひねがひぬること、政に志たがへるものゝ心ざし、さこそあるべけれ。

身のために君を思ふもふたごゝろ
　きみの爲にと身をばおもはで
身はふりぬ行末とほくつかへよと
　子を思ふ道も君をこそおもへ

家隆卿の「おほかたの秋のねざめのながき夜も君をぞいのる身をおもふとて」と、よめりしは、なべて人情の常にて、私ながらの忠臣なり。身をのみ思へるものにたくらぶれば、此は彼よりよしといふべしとは、楠贈三位中將その意を打翻して、臣道の守りを示されし、身にしむばかり有がたくぞ覺侍る。後のうたは、すべて、子のおやたるもの、君のために育つる子なれば、つとに、よはに、つとめはげまして、文武の道にうとからぬやうにおふしたてゝ、御用に立べ

きものに成べしとなり。怠たりし我ころ人にあらずとも人になしたき子のゆくへ哉」と、こひねがひぬるころ、老ての奉公なるべけれ。おのが無學放逸なるまゝに、子までも、野らそだちにはふらして、能なしの道しらずになしはてゝんは、不忠のうへの不忠なるべし。

さかさまに着るや衣のとしもへぬ
　つかふる道にいそぐならひは

鳥の音ぞわかつきごとになれにける
　きみにつかふる道いそぐとて

東方、いまた明ざるに、衣裳を顚倒すとなん、むかしのからうたにいひけるこゝろをへなるべし。君につかふまつる道は、させるいそぎの事あらずとも、常につとめて、とく出て、人におくれざるやうにと心がくるは、上をおもんじたてまつるの禮なり。これらも、妻たるものゝ、まめやかに心を用ゐて、かひ／＼しく、つとにおきて、ものすべきことぞかし。すべて、親夫の出入には、何事をして居る時にても、かならず送迎の禮をつゝしみ、衣帶の出納を手づからまゐらすべし。ゆめ／＼、愛に狎て、禮を失ふべからず。

（つゞく）

美服を着れば
　德をやぶる
うのむくひ
　人にそねまれ
又は貧苦におよぶ

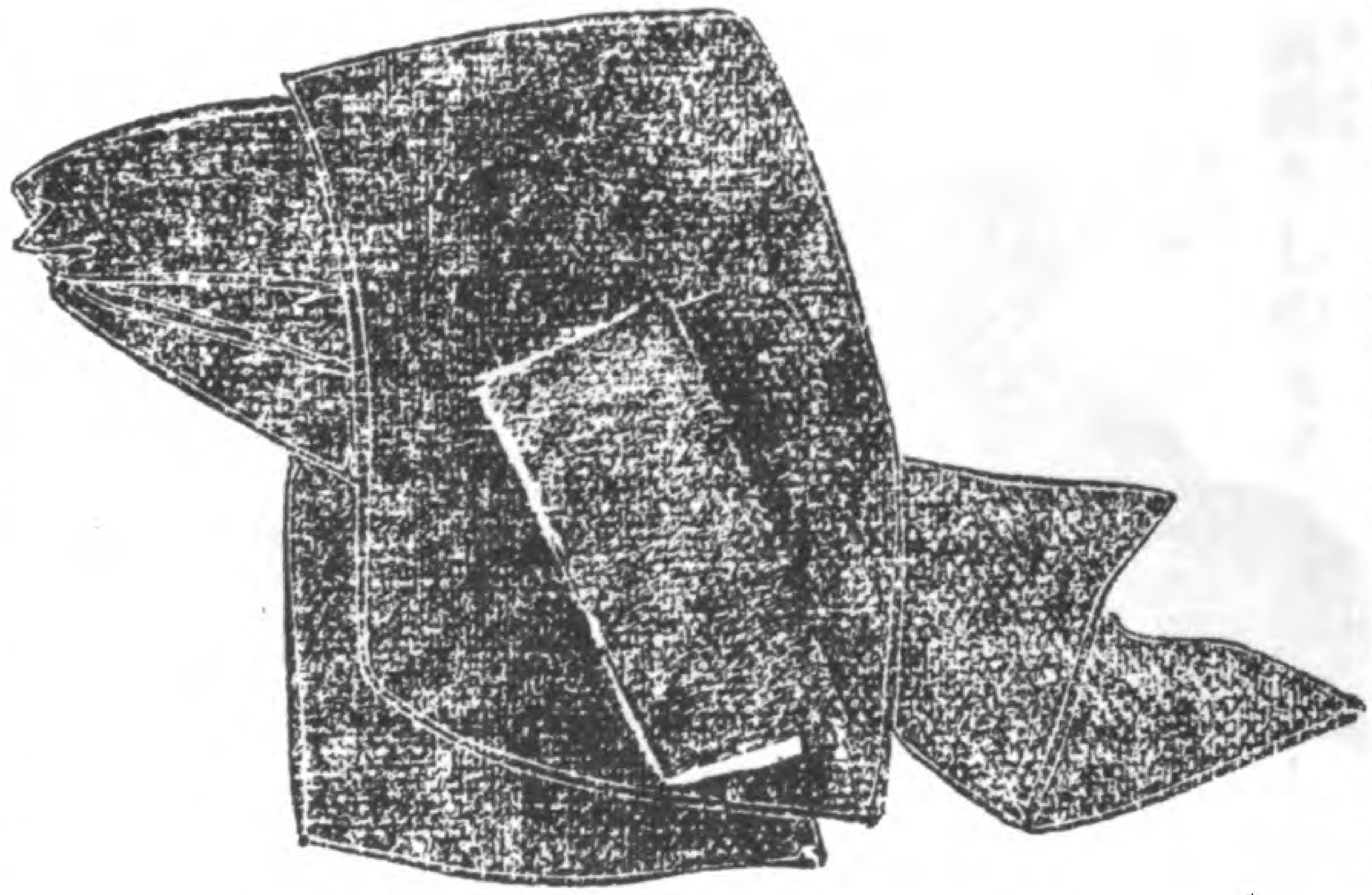
（積德叢談）

井蛙小録

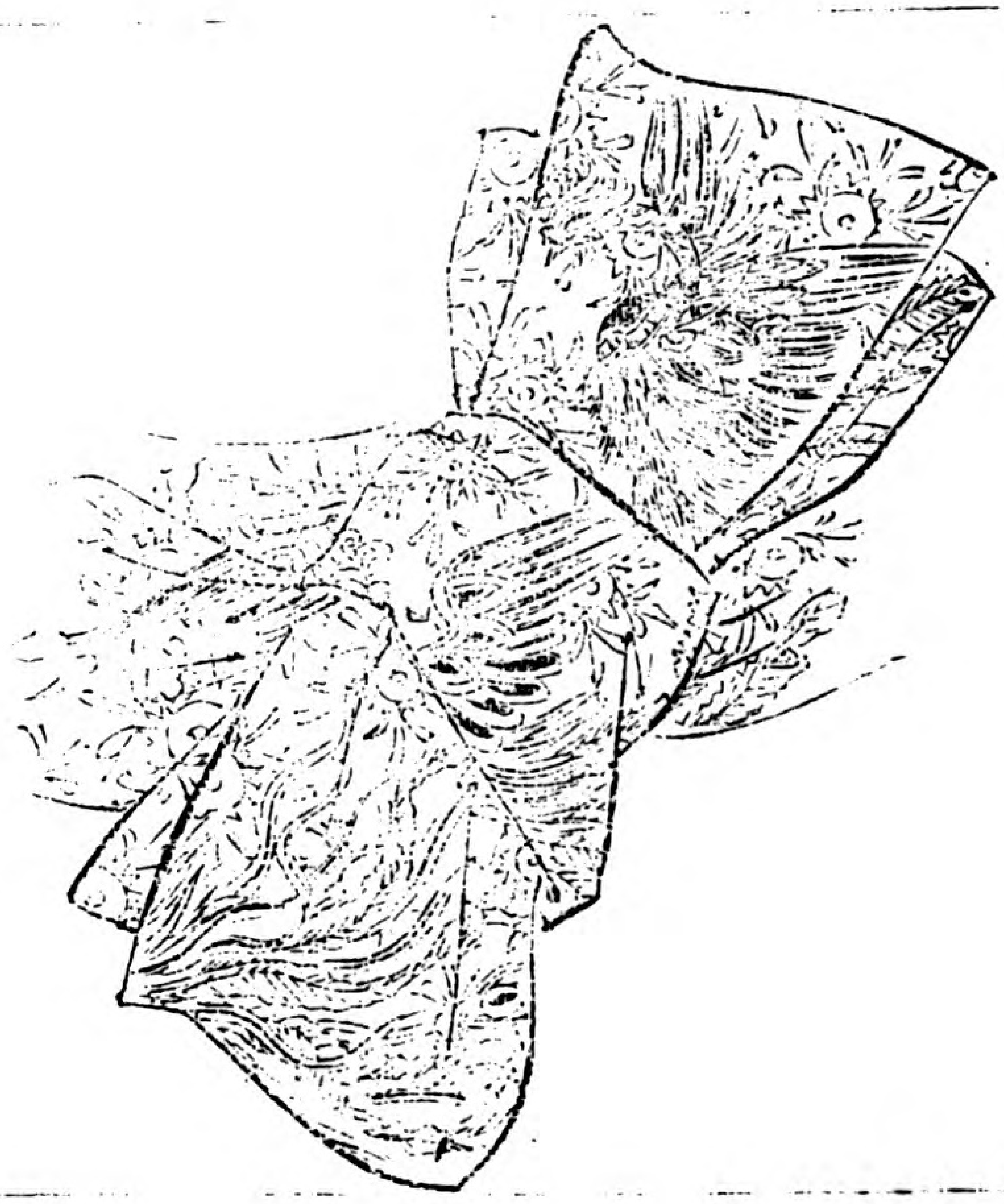
井上頼文

帯のむすびかた（承前）

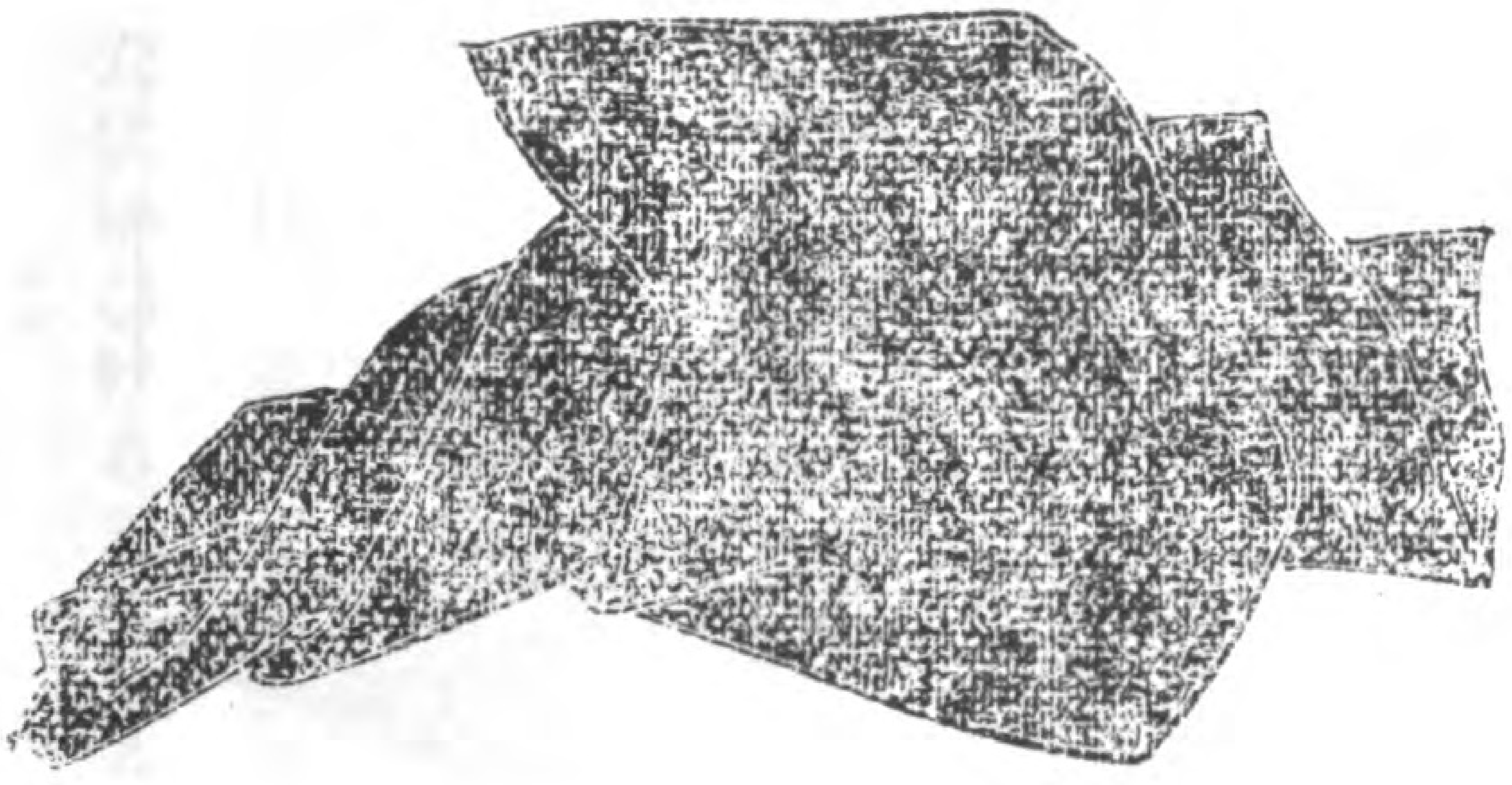
ひきわけむすび



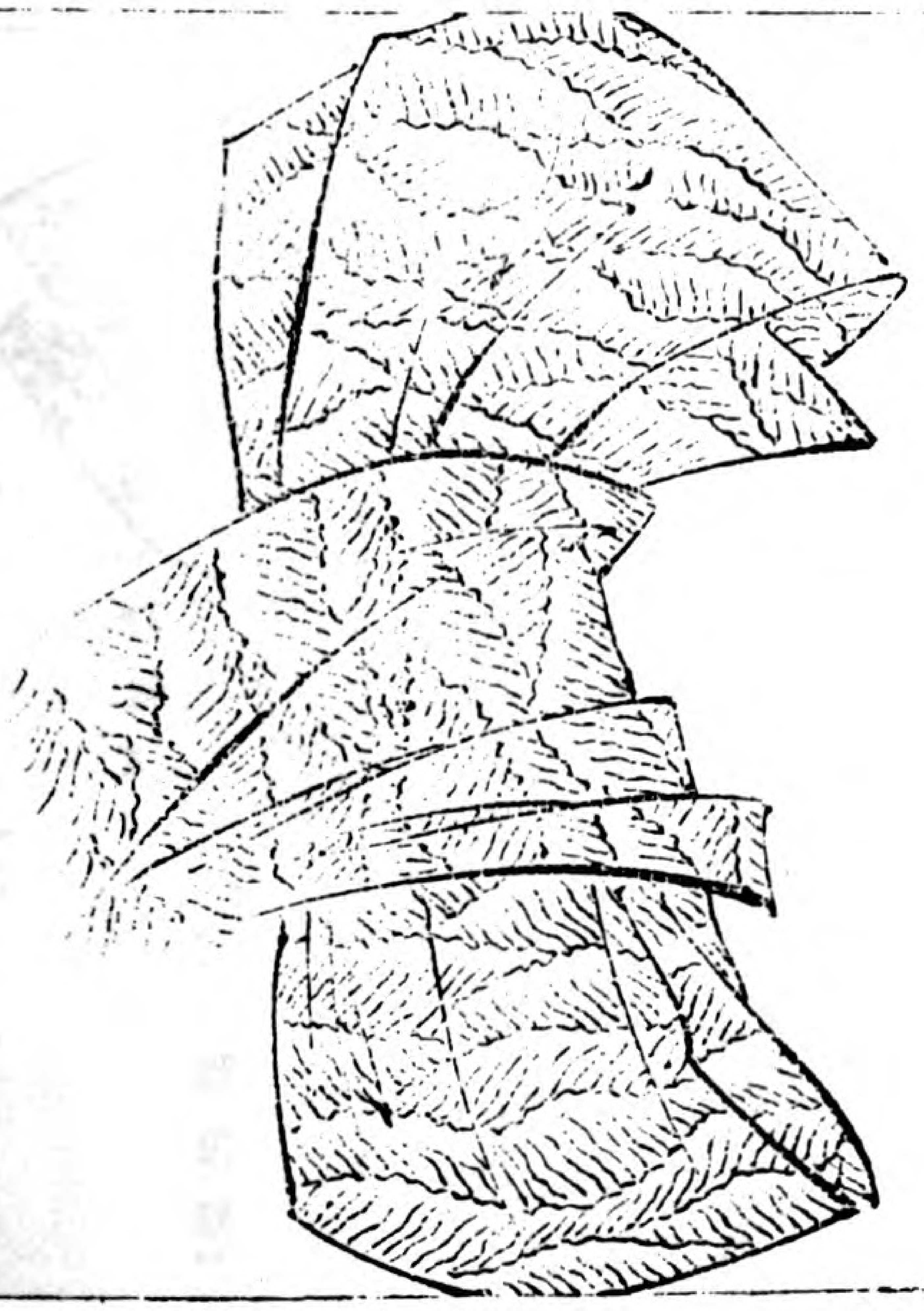
引むすび



志んこ結び



はさみ結び



草根集

こは、あるやんごとなき姫君の、手本の料にとて、加茂の眞淵うしのもとに請はれしに、ことしげれどとて、大野よ野子にいひつけて、かゝせられたるものなり。文のすがた詞づかひなども、いとめでたくて、ふみのしほり、ともなるべきものなれど、こゝにかゝげつ。この、餘野子は、眞淵大人につきて歌まなびせし人にて文も歌をもよくせり、紀伊の殿に仕へ、瀨川ともよべり、鵜殿孟一といへる人の妹なりといふ。後にあまとなり涼月院といへり。天明八年十月八日みまかれりとぞ。

編者しるす

むつき

うちの女房のもとにすりやうのめよりおくる文

つきせぬ御ことぶきも、とくこそきこえさせ侍るべきを、えせし、おほやけごとしげからむほどをすぐしてと、けふまでになりにたり。いでや、例のいはひごとは、つるかめも、なほ、あかねど、中々にてなむ。としのあらたまりては、いとゞうちわたり、なまめかしう、神代のまゝのおきてたがはで、おごそかならむこそ、おしはかりだてまつるもかたじけなけれ。さるは、あまたの女房たち、うへのも御かたがたのも、このごろは、いとゞよろづに花をおりてさうぞきつゝ、かけまくもかしこき、おまへともに、さしつどひたまふらん。内々の御ありさまいかにみるかひあらむと、御せちゑ男踏歌など、世にのゝしるにつけても。かぎ

りなうゆかしう、音にのみきく百しぎを、あさ夕に立ならしたまふらむ、御身のすくせこそ、うらやましけれ。ひと日わをうま見むとて、いざなふ人侍りしかど、としごろ、ひなのすまひにうもれ侍りにけれど、ゆくりなく、さし出むことの、かかやかしさに、くちをしう、おもひとまりにけり。いかで、此ほど過したまひて、のどかなるをりわらんに、かならず、まかてたまへかし。ゆかしき御ものがたりもきこえ侍らむや。さてころ、春のこゝちもせめ、たゞぬ中だちたる、まかきのうめの、やゝけしきだち侍るにも、おなじくぞ、ちらぬ先にて、便の風にも、つたへまほしう、鶯は、物のはまちきこえ侍り、かしこ。

きさらぎ

さきのかへし

きのふけふは、きさらぎの名もしるく、さえかへり侍るを、ことなくおはしますにやと、かきくらし雪氣のそらにも、いとおぼつかなさ、もよほし侍りてなむ。まことに、いにし月は、めづらかなりし御せうそこ、はつ音まちえしてゝちにも、まさりておぼえ侍りしを、女叙位女王録など、其事となう、ものさわがしきほどにて、さらに、わたくしのいとまなう、せんしかきは、いかでかはぞ、かへりほど過侍りしは、なめしとやおぼすらむ。げに、よにふりにたる千とせ萬世も、此ごろは、ましてつきなきほどになりにたれど、このおこたりも、なまも、いまみづからまかでゝこそ、きこえたてまつらめ。さるは。とはせ給ふなるくもの

上の御ありさまは、げに、聞えやるべき方もなう、此ごろは、まして、萬にはえ〳〵しきことのみにはべるを、なにごとも、いふがひなき身には、かかるまじらひもまばゆきやうにて、のどかならむ御すまひこそ、かへりてうらやまれ侍れば、そゝのかしたまはでも、をり〳〵は、まかでつゝ、日ごろの國のおもしろき所々めづらかならむ海山の御物がたりもきかまほしう、おもひわたり侍るを、あやにくなるあしわけをふねぞくるしきや。つけたまへる、まかきのうめも、今やさかりならむと、おもひやられて、此ごろは、夜のまの風もうしろめたうかをだに殘せとは、思ひのとめがたう侍れど、あながちにも、いとまもちつけて、二日、三日のうちに、かならず、ものし侍るべし。よろづたいめのをりにとてなむ。

やよひ

いかに、みこゝろは、さわやぎたまふや、なほ、おなじさまとのみきくこそ、おぼつかなけれ。まむしの里居だに、さう〳〵しくおぼゆるを、今は、およびもそこなはれぬべき日かずにも成にたりや。ひと日、辨のもとへ、春の行へもときこえたまへりしは、げにさぞと、心くるしうぞおもうたまへ侍りし。こゝには、れいの、これかれ、このうらゝなる空のけしきふきくる風もたゝならぬに、かの飛鳥山てふところを、わりなくゆかしがりて、其のとりならで、飛立ぬべくおもはゆるさまども、物くるほしきものから、をかしうて、さは家つとに花のみは、いなはゐあることのはそひなは

とてゆるせしが、きのふしのびて、六たりむかり、わらはゑもづかへなどやものしつらん、かゝるにつけても、をりあしきなやみを、たれも〲くちをしかり、聞え侍り。よべいぬの時すぐるほどなむ、かろうして歸りにき、みなならはぬ山ぶみにつかれたるは、げにあし引こそ枕ことばなれとみゆるをこゝちは、いとほこりかにて、いまも猶めでくつがへりつゝ、花のいろは、さらにもいはず、すべて、をちこちのながめ、たぐひなく、雲の外なるつくはの山も手にとるやうに見え、ふた國の中なる川も、たゞ、このふもとをゆくなどかたるをきくに、われさへあくがれぬべきこゝちするを、まして、いかばかりか、おもひたまふらんと、おしはかりぬ。山つとの櫻、つはな、すみれ、など、これかれおくるよしいふに、みづからの心ざしに折そへさせたるは、「咲やらでまつにかゝれるふぢなみの花こそひとのこゝろなりけれ」とも、見たまへかし。盛になりなど、花の宴すべておもふを、あらずとも、いかに、さう〲しからむ、おこたりはてたまはずとも、ものしたまへかし。なほ、くはしう大輔がもとよりきこゆべきなり。

卯月

菅のねの、長き春日は、花やてふやと、夢のまに過し來ぬるを更に、此うづきのそらの、くれかたさよことをあまたにと、ゑだしおくれし藤山吹も、いつしか汀の水に影だにとまらず成にたれど、ほとゝぎすにのみ、心をつくし、繪にてぞ、こよなくなぐさみ侍る、こゝにはやうよりつたはりきぬ

る、ふるきつしなどよりとうでつゝみ侍るに、ものがたり名月なみのなども、げに、いにしへのは、ことにこそ侍れ、いふよしなき筆のたゞずまひは、さるものにて、人のいへる、萬の調度も今の世にめなれぬこと多く、はた、女房のさうぞくなど、其をり〳〵の色めあやをわかちて、さま〴〵こゝろしらひかけるは、見しらぬめにだにいと興有事におぼえたまふるを中々おぼろげにては、そのかたかどをだに、まねぶべくもあらねば、たゞ、此ごろのめにちかきを、何くれとゝりあつめつつ、はかなきひとまねに、心いれ侍るにも、をしへさとす人しなければ、おぼつかなきことのみおほく、なむ。そこに、いにしへいまと、いとうるはしうて、さま〴〵つとへたまひ、御みづからも、上手におはしますよし、いかで、すこし見侍らばや、いみしき名しのたてたるすぢ、かど〳〵しからむ筆づかひよりも、いたりふかき御心にてこそ、こよなうはおはすらめど、おしはかりまゐらするになん。此わたりには、また、あし手歌ゑなどだに、はかなむかしからねど、まのあたり、かたみに、うらなくものし侍らむ、ものさわがしきほどすぐして、道のほど、かつらのおひ風もをかしう、ほとゝぎすのよすがも有ぬべければ、月まち出で、なのびやかになどおもひをり侍るなり。あこそのせきをなすゑさせたまひぞや。

（つゞく）

比那問答　（問の詞略す）

故　伊勢貞丈

一女子の比那を翫ぶ事、古き事也、ひゝなあそびの事源氏物語所々に見えたり。是は、女子のもてあそぶ事也、三月三日に、今世ひなを立る事は、巳の日のはらへのなで物より始りたる事なるべし。三月上の巳の日に、古は、はらへをする、はらへは、身の災ひをはらふ也、此はらへをするに、陰陽師のもとより、紙の人かたを送るを、その人かたにて身をなでゝ、陰陽師につかはせば、それにてはらへを行ふ也。人かたは我身かはりになる也。されば、其人がたを、かたしろとも、なで物とも云。源氏物語やどり木の巻の歌に、「見し、人のかたしろなくむ身にそへて恋しき瀬々のなで物にせん」と、よめるにて知るべし。古は かの人かたを陰陽師の方へ遣はし、はらへを行はせたるを、後代は、はらへの具にはせず、棚にならべ置て、酒食をそなへ、もてあそび物とせり。是、巳の日のはらへの具の人がたと、古 女子の常のたはぶれなる、ひゝなあそびと、一つにまじりあひしなるべし。今も世に紙びなは、ひなの本式也と言傳へたるは、かの巳の日のはらへの、紙の人がたより出し故なるべし。

女畫師

乙羽庵主人

其九

よしや三代相恩の君ならずとも、一日半日祿を食める以上は、恩を仇にして、降を官軍に納れらるべきや、命を風前の塵にたゝへ、骨を野末の月に晒すまでも、會津家に力を盡すべきは勿論なる池旭、今一旦擒の身となり、無事に宥されたりとは云へ、この儘に素知らぬ顔して、城下を離るべき義理ならと觀念し、再び本城に立歸らんものと、陣中を出でゝ四邊を詰と眺むれど、月にはかゝる村雲も無く、秋の空の清く高ふして、雁の一行啼き渡る氣色の興ある、なか〱書も及ばぬ景と、思はず足をとゞめたり。

見渡せば霜に光る枯木の枝、習々と吹く風に鳴りて、影を幔幕に映す彼方には、篝火焚きて天を焦す一群の兵卒の、其處此處に輪をつくりて屯集するの外は、眼に觸るゝものだに無き野營の暮、哀れにも淋しきは、時雨に近き陣頭の秋風なり。

池旭は放たれて籠の鳥の蒼旻を翔る如く、悠々と隊將の營所を立出でたれど、行き

行きて月の前に頭を傾け、つく〴〵と身の落着を考ふれバ、一寸前は闇路を辿る心地して、歩みも自ら遲れ勝なり。

あア過つた、妾は旅繪師とは云ふもの丶、一旦會津侯の知遇を蒙り、殊更御臺樣よりは普通ならぬ御寵愛を受けながら、今官軍に問はれし時には、お慈悲に一命を乞ひたる不覺、ヱヽッ何の口よりあの樣なる辭の出でしぞ、何の舌で今の挨拶をしてけむ、思へバ我ながら淺猿し丶。御臺樣の今日の所思は如何ならむ、家中の衆の御考は何うあらうか、池旭は命一つを拾はん爲めに、官軍に阿り、書を陣中にて書き、哀訴嘆願して城下を落延びたりなど丶云はれなバ、末代までの恥辱なり、何卒して今一たび本城に立歸り、御臺樣に御目にか丶り、またも戰塲の御供申して、潔く討死せむ、人は一代名は末代なり、さうぢやさうぢやと獨語ち、徐々と歩を運ばせぬ。折から巡羅の兵卒二人、池旭の眼前へヌッと現はれ。何者なれバ案内も無く陣中を横行し、それのみならず味方の動靜を窺ふ樣子は、願ふに其方は會津方の斥候ぢやな、いざ尋常に縛目を受けよと、呼びつ丶間近く進み寄れり。池旭は事の意外に驚き。いえ、妾は今の先刻隊長樣よりお宥しの出ました、旅畫師の池旭と申まするも

の、決して胡論な曲者では御座りませぬと、詫びれどなか〳〵聞入れず、兵卒は威猛高になり。默止れ其方、婦人の身として大膽にも味方の陣中を覗き込み、四方に眼を配る樣子は如何にも胡論、さア隊長の陣所に引立て行かむ、言譯あらばそれにて致せ、我等が耳にはその口上が這入らぬぞと、云ひつゝ繩に手をかけたり。訝かしや、時ならぬ陣中に喇叭の響き聞えぬ。二人の兵卒は何事ぞと耳を欹てなから、彼方を見やれど、陣所〳〵の篝火盛に燃えて、明るきこと白晝の如し。遙に城ある方を睨むに、月光白く霜を染めて、旗幟の影を映す邊を、早馬にて驅くる二人の武士、官軍の本陣に入るかと思へど。今まで頻りに吹き立てたる喇叭の聲は、野田の蛙の鳴きを止めたる如く、弗と吹き歇んで、風の音のみ高く聞えぬ。二人は更に合點ゆかねど、兎も角も怪しと思ふ池旭を引立て行かんとする時。何事にやドヤドヤと此方に走せ來る兵卒ども。會津も敵對ならぬと觀念したか、降參とは腑甲斐無い事ぢやないか、しかしお互に無事なる段は、目出度いと云はうか、不仕合と云はうか、明日からは戰爭も見られぬ事になりますぞ、わはゝゝゝ早く注進に參りませうと、云ひつゝ二人の兵卒に辭をかけ。巡羅の御兩君、御苦勞千萬ぢや、時に

それなる婦人は……………やゝ先刻隊長から御免になつた、旅畫師ぢやが、して〳〵何ぞ不調法でもいたしましたか、何と仰せらるゝ、胡論な奴ぢやと、それは措き給ふ方宜しからう、何故と申せど既に隊長が御免ありし女性をお引立てなさることも、少しも手柄にはなり申さぬぞと云はれて二人は閉口し。御意に御座るかと、縄目を解き。大目に見て宥して遣はすぞと、またも難無く放たれけり。

池旭は急ぎ足して陣外に立出で、並松の間に來りけるが、何をか思ひ出しけむ、本城の方を伏拜みて、地に頭をつけ。不忠不義の池旭、この處にて今日の罪科をお詫びいたしまする、數ならぬ妾を御取立下され、これまで御目をかけ給はりし御高恩海山にもかへ難く、決して忘却は仕りませねど、一先づ御城下を立退きます、聞けば一家中の御爲めを思召され、御降參遊ばしましたる由、御無念の程御察し申上げまする、さりながら大義名分とやらを申せば、固より錦旗に御敵對遊ばしまするこど、御家の御爲め惡しき趣、よくぞ御決心遊ばしたり、妾はこれより諸國を廻りて丹青の技の修行を致しますれば、惡からず思召下されませと、涙と共に物語れど、松の露落ちて、袖に月影の宿るも悲し。





花菖蒲

千稲子

其四

悲しきは秋の夕暮に増す物ぞなき。日は西の山に沈むで名殘の影全く消えねど、東の空に月は笑を含みて、薄く草葉を照し初めけり。あはれ、吹き來る風の音、波打つ尾花、塒に迷ふ夕鴉、遠く或は近く耳を掠むる蟋蟀の聲々、此に劣らじと露の白玉羽に受けて足元に音を惜まぬ鈴虫松虫の聲、思ある身には皆斷腸の種ならぬはなし。此取り集めたる哀を一身に浴びて、裳裾を露に濕し、被衣を風に拂はして、いそ〳〵走り來る菖蒲、足を緩めて暫し佇立み、息苦しき胸を撫でゝ、「母様の留め給ふも聞で、御藥を取りにと來りしが、思の外に手間取りてさぞ待ち給ふならん。オォ寒や、此樣にては如何に御寒いことやら、」云ひ棄てゝ又走り行く跡に、横手の草叢より半面顯はしたる怪しの曲者、足音聞えぬ頃荊蕀を掻分けて出るを見れば、一人ならぬ二人なりけり。舌打鳴し互に顔見合せて莞爾笑ひ、月影踏で優々と歩み去

りぬ。
如何に急ぐとも、門入る頃は日影全く暮れたりしが、内は雨戸も詰めず燈火もなく、差し入る月は木枝の陰を寫して、隅々までも隈なく照しぬ。「さぞ御寒くおはしけん、御體に障りはせぬか、母様只今歸り侍りぬ」。寢入り給ひしと見えて答もあらねバ、足拭つて上にあがり、隔の襖靜に開けて一足踏み込む途端、「ヤッ」、叫ぶと共に思はず前に撞と倒れ。慌て悶きて轉がり寄る母の側、無殘や血汐に染りて哀の御最期、唇嚙み緊め拳を握り詰め給ひ御魂は巳に此世にましまさず。是はと計り乘し懸りてヒシと抱き附き、「母様アー」呼んだるまゝに跳ね起きて走り出で、戻り來ては又ヒシと抱き附き、「母様アー」死骸を搖りてわつと泣き出せしが、又ムックと顏擡げて起き上り、氣も轉倒し足もしどろに、右へ宇呂〱左へ宇呂〱、果は其場にバつたりと倒れ、又起ると見れバ死骸に手を掛け、亂髪ぶる〱と震はして血に呼ぶ一聲、母様アー」。
哀れや嵐に打れたる春の花、身も世もあられず暫しは正體も無く泣き壞れしが、やがて震ふ唇嚙み緊めて顏振り上げ、眉逆立てゝ凋と見開いた兩眼、狂ふ血汐に涙を

混ぜて凄く光れり。「ナエヽ殘念の事したり、留め給ふ儘み止り侍らバ、かゝる事はあるまじきに、己れまだ遠くは行くまじ、母の仇敵安々と遁そうか」、岩をも通す桑の弓、露も氷れば石よりも堅し。況してや無念に沸き立つ女の一念、凝つては岩をも鐵をも將た刄の雨は兼ての覺悟、短刀片手に握つてすらり引き拔き、じりつと見渡せば、綾に閃く穗尖の陽炎匂ひ細やかに水滴る計り。ぴたりと鞘に收めて死骸を衾に綻與と包み、涙を振つて立ち上り、ひらりと庭に飛び下り月影横に縫ふて一散に馳け行けり。

蕭々兮、颯々兮、秋風月を洗うて天地淸澄たり。露や置くらん艸葉の陰に玲瓏たる無數の白玉、取らば消ぬべき今宵限りの生命の宿り、悲しや母なき身には魂かとも見ゆらんかし。被衣面深に覆へば月の光は色無き顏を照して愈青白く、吹き出す息は湯氣走りて霜とや降らん露とや結ばん。跡見返りながら一群並ぶ森を潜れば、月影は鬱たる枝に隔てられて夜氣陰々人に逼り、四邊寂寞として遙の梢に梟の一聲、身の毛自ら栗立ちて凄し〳〵。さはれ胸は怒りに炎えて無念の潮全身に染み渡り、常には單の衣にも堪へ兼て露に壓るゝ花の身も、向ふ目前に恐怖といふ物を置かず、

冬毎に降りや積けん落葉を踏み鳴らし、太き松の本に身を寄せ掛けて、艸葉に宿る露に咽を濡し、「エヽ無念なり遠く逃げ去りしか近く隱れしか影だにも見えず、さりとてをめ／＼遁して堪るべきや、艸掻き分けても捜してくれんに……アヽ苦しや、」胸を撫でゝ息休むる折から、旅行く人か里人か、高く笑ひ低く語り、歩み來る足音に振り返りて隙し見れど影二ツ。若やと足踏み緊めて起き上り、後の木蔭に身を隱し、息を涸して遣り過し、音を偸みて歩み出で、「何れの御方か知り侍らねど少し待ちて給はれ、不意に呼び掛られて彼方は胴震ひして驚訝りし、思はず二三歩飛び除きて身構しながら、中腰に隙し見て聲張り上げ、ナ何者だ……アヽ驚訝りした」、此方はする／＼と近寄り行けバ、玄り／＼と跡に避り、つく／＼と眺めて一人は大口開きカラ／＼と打笑ひ、ハヽヽヽ化たりや化たり、女か年少か知らねど頭の先から足の先迄寸分違はぬ眞の人間だ、さて／＼よくも化たりや、こりややい古狸め、耳があるならよく聞けよ、百姓子供の愚鈍た者ならいざ知らず、腰に太刀ある我々を化そうなどとはよくも／＼も、此御臍が茶を沸すは、それども道の疲れを慰めんとて、他人を欺すのは個様するのだと化けて見るのか、こりや／＼寄るな寄るな、

「エヽ氣味が悪い寄るな、こりや此太刀が目に附ぬか、餘り近寄つて生命を棒に振るなよ」。塒求むる群雀、口は立派に叩き散せど胸の動氣はいつかな収らず、心の底には恐怖の弱虫跳ね廻れど、眉毛に唾塗り附けて、暗にちらつく星の影眼のみぱち〳〵と光らせり。やがて寄り行けど避り、動かねど立留り、太刀の柄に力を籠めて流石に身搆は壊さず。此方は思はずホヽと打笑ひ、これは〳〵頓だ御間違ひ、妾は都に歸る者に侍れど、先の程かゝる所に迷ひ入り、左に行くか右へ行くべきか方角さへも譯らねど、ほと〳〵苦しみ侍りしに、幸方々の通り給ひし故、御呼び申した譯、必らず〳〵怪しき者に侍らねど、何卒都迄御連れ下され」。二人は顔前後に廻して穴のあく程打眺め、「女だな、どうやら眞實の人間らしくも見えるが……成程道を失ひて迷ひ込みしといふは聞えたれど……ハヽヽ旨いぞ〳〵そう旨くやらなければ人間は欺せぬて、何だか後に尻尾がぶら〳〵して居るらしいぞ、したが眞の人ならど氣の毒な譯なれど……然らど其方はいづれの女房ぞ。何の使で何れへ參つた」「これは仰々しき御尋ね、素より申さねではなけれど……何を隱し侍らん妾は六波羅の大臣殿の……」「何、六波羅とな、大臣殿の家の女房か、ハヽヽヽそうと早

く譯るならわたら膽は消さまいに、さらで來ませ、一緒に參り候はん、我等も六波羅へ歸る者、御身も知り給はん六波羅の御內に青山殿の手の者に侍る」、聞くと諸共に顏色サツと變り、「オヽ嬉しや」、云ひも終らず走り寄る被衣の下に、暗を破つて稻妻びかりと光かり、「母の仇敵覺悟しや」、心許した一人が橫腹突き通すを、敵の早きか手先の狂ひか一寸むかり脊を橫に掠れば、アツと叫びて飛び除くを「巳れツ」と踏み込む一足に胸板グサと貫き、取り直した尖先風を立てゝ一人が目先に霜夜の月と閃きぬ。」

憤怒に鳴つたる菖蒲が腕に、神や宿り給ひける。忽ち二人の大の男を物の見事よ切り倒し、亂るゝ足踏み固めて首搔き切り、道もあらぬ草原眞直に驅け戻りて母の側に五體を投げ出し、身も浮く淚の雨に生きたる心地はあらず。あはれ痛しや風に亂るゝ落花霏々。

文林

初春鶯　東久世通禧

心とくはるをしらせてしらゆきの
またうちとけぬうぐひすの聲

森鶯　鍋島直大

春たちしるしなるらん風さむき
むかひの森にうくひすのなく

森鶯　前田利鬯

花もなき老曽のもりのしたかげも
すきうかりけりうくひすの聲

植松有經

もりのうちにまた燈もみえながら
あけはなれたるうくひすの聲

小出粲

こがらしのをとのみきゝし岡越の
もりのした道うくひすのなく

谷勤

春なからまた風さゆるかたをかの
もりのうぐひすきく人もなし

坂正臣

たちこむる霞をもれてきこゆなり
田中のもりのうぐひすのこゑ

大口鯛二

うふすなの杜のともしび影うすく
殘るあさけにうぐひすのなく

或人のかける以呂波假字を見て　松浦辰男

うるはしき我國ぶりぞにほひける
　筆のはやしのはなのいろはに

尋梅　藤井行麿

はる菜つむ野澤の子らにもの申す
　この道ゆくか木根かはのうめ

梅　西川須賀雄

うら／＼とたてる霞のもすそより
　こぼれてにほふのへの梅か香

春天象　野崎宗英

岩戸明けし神代をかけてくもりなき
　空にたちくるはるのゝどけさ

城山懷古　森馬太

矢さけびのおとをしぬびて丈夫の
　しろやまゝつを吹くあらし哉

來て見ればおとものこらす城山に
　むかしなからのまつ風ぞ吹く

名所梅　内山直枝

香をとめて人もとへかし昨日今日
　あすかの里のうめのさかりを

森鶯　鍋島榮子

あすも又きてこそきかめ梅のはな
　にほへる森にうぐひすのなく

柳原愛子

春がすみたち出てきけむ打わたす
　野中のもりにうぐひすなく

蜂須賀隨子

時わかぬ常磐のもりのうぐひすの
こゑはかりこそ春めきにけれ
小池　道子

雪きえぬもりのまたかせ寒けれど
こずゑかすみてうぐひすの鳴
北島以登子

鶯のなくこゑたえずきこゆなり
のなかの森のかすみがくれに
松平　健子

うちかすむわづまの森のみしめ縄
ひきはへて鳴うぐひすのこゑ
鶴　久子

里とほき田中のもりはうぐひすの
さへづりくらすところなりけり

鶯

軒近きひとむらだけにふしなれて
おくうぐひすの聲きこゆなり
諏訪　晴子

朝老鶯

白かしのみつ枝なびきて朝つゆの
こぼるゝかげにうぐひすの鳴
小川　昌子

梅間鶯

搔ならす琴のしらへもうぐひすの
なく音も同じのきのうめが枝
尾崎すう子

海邊霞

沖に出てつりするあまは我いへを
かすみの奥にかへり見るらん
安東　菊子

樹上鶯

うぐひすの枝うつりして啼みれバ
師岡須賀子

ねくらは梅にかぎらざりけり

山霞　片岡光子

この頃はかすみ渡りていづかたの
　山もそれかと見えわかぬかな

初春鶯　河原崎棵野

春浅みもゆるともなきわかたけの
　御垣がはらにうぐひすのなく

初音　鮫島元子

久かたの空ものどけきはるの日に
　初音を立つるにはのうぐひす

某の別莊にあそぶ記

女子高等師範學校第三年生　楠島馨

常は、物學びに、暇なき身も、休暇の日は、いとのどやかに、心も、何となう、のびらかなるを、冬とはいへど、小春の空の暖なるに催されて、桃櫻など、花のさきたるもをかしければ、いたづらに、家のうちにすごさんことのあたらしくて、つね音づるゝ家を驚かしたるに、そこなる、人々も、おなじ心にやありけん、今日は、いとよき天氣なれば、なにがしの別莊にあそばんとて、用意したるを、いざたまへ。もろともにとすゝめ給ふうれしくて、伴はるゝことゝはなりぬ。年おい給へる人々また、おさなきなど、あまたうちつれて立ちいでぬ。行手の家の木立の紅葉したる、或は籬の菊の咲き殘れるなど、ゑもいはず。やう〳〵、人しげきところをはなれ行くまゝに、更に、あはれもまさりてなん。小田にかり殘せる稻をあさら

んとて、雀のむらがり來たるが、ひたの音におどろかされて、飛びまがふさまなど、いとをかし。かうて、かの別莊につきぬ。こゝは、もとよしある人の邸なりしを、今は、さる富豪なる人のものとなりたるよて、その廣らかなること、たとへんにものなく、その清らかなること、たぐふべきものなし。後のかたなる門よりいりて、すぐに進みゆくに、このあたりは、すべて、秋をむねとつくれるにや、うつくしく紅葉したる木々の松のひまなどより見えたる、いひしらぬけしきなり。細き道をつたひゆくまゝに、竹垣しわたしたるところにいでぬ。こゝに、假初なる門あり。その傍に「是より内鴨池係 猟に入るべからず」といふ札たてたり。此の門をすぎて、なほすゝみゆけば、うち開けたる芝生なり、こゝに、さゝやかなる小屋ありて、鳥籠めく物などすゑたり。つれだちたる人そこにゆきて、何にかあらん、ひそやかに囁していへど、一人の翁立ちいでゝ、手まねきする。は、こなたへといふなるべし。こゝにては、何事も、たゞ、ひそめきて、人々、うちかたらふこともせず、高き足音だにあぐることなし。此は、もしさはがしくせんには、鴨のおどろくがゆゑなりとぞ。その翁のみちびくまゝに、せまき道をすぎて、少し高き方へのぼり行けば、塀の如きかこひあり。小さき孔をあけたれば、それよりのぞき見るに、其の内は、目もはるかに、廣き池にて、水の面に、鶩の、多く浮べるが中に鴨のうちまじりてあそべるさま、たとへなくをかし。さるは、いと、

おびたゞしき數にて、さばかり廣き水の面も、ほと〳〵覆はれたり。中島の岩の上に、うちむれてあそべるさま、いと樂しげにて、思ふことなきさまなり。遠きかたなるは、木の葉のうかべるやうに見えて、いとをかし。近きほとりにゐるは、頭を羽がひにさしいれて、水の上をわたるさまなど、まるく見ゆ。青き、紫、まじりて、美しき羽色の日影にかゞやきあへるも、目ざましきこゝちす。かの翁、あやしき笛とりいでゝ、ふきすさめば、今迄、心なくあそび居たりしが、皆、岸邊近くよりきぬ。此は、常に、かくして、餌をあたへたれば、例の如く食を求めんとて、よりくるなりけり。世にめでたき遊園多かれど、かばかりなるは、いとありがたかるべし。こゝを出でゝ、右の方へ、

猶すゝみ行くに、此のあたりは、秋の野のさまにて、見わたすかぎり、萩原なり。口をしう、いますこしはやく來たらましかば、宮城野の秋のけしきを、こゝながら、見るこゝちせられつらんをなど、いひつゝゆくに、こたびは、春によれる庭とおぼえて、山吹のかぎりを、いと多くうゑたり。猶ゆけば、椎、栗などのおちたるに、小供などの、よろこびきそひて、ひらふめり。こをすぐれば、梅、桃、櫻など、うゑならべたり。こをすぐれば、うち開けたる園なり。家、いとひろうつくりなして、池の心、ゆたかにたゝへたるに、其の水、かなたにいり、こなたに流れて、おもしろきこと限なし。芝うゑたる、土橋など、三ッ四ッわたしたるが、鏡なす水に、かげをとめたり。向ひには、小高き

丘あり。岸には、なつかしき姿したる松、水の面に、枝をたれたり。男兒等は、舟にうちのり、かなたこなたこぎめぐりて、さわぎのゝしる。女兒等は、よきほどの岩の上に居りて、釣するに、小さき魚のかゝりたりとて、ゑみほこるも、一しほの興をそへたり。築山にのぼれバ、池の面は、目の下にて、緑深き松の木の間より、さゞ波の、清く青やかに見ゆる、恰、土佐ゑにかける庭などのやうなり。こゝに、將軍の腰掛石といふあり。此は、むかし、徳川家の盛なりし頃、將軍の、此の邸にあそびたまひし時のなごりなりとぞ。あはれ、此の池水に、舟うけて、主從もろともに、興じあそび給ひけんよなど、昔のことさへしのバれて、いとあはれなり。さて、この庭を、右にいりたる處に、門あり。こゝをいれたる、動物園なり。今は、動物のかず、あまたはなけれど、めづらしき鳥獸あり。百千のはど、人の、多くいりくるけはひにおどろきて、飛びまがふさま、いとをかし。こなたの松原には、うるはしき鶴のあそべるさま、世ばなれて見ゆ。かなたの森かげには、鹿のたゞずみて、うちなきたる、故郷の山こふるやと、いとあはれなり。かく、めでたき景色に、心あくがれて、唐のなにがしにはあらねど、仙人のすみか、たづねいでけん心ちするに、思ひ見れバ、こゝも、都のうちなりけるよと、うちおどろける程に、いづこの鐘のねにかあらん。今日も、くれぬとつげわたるに、あまりに、おそくかへらんは、便なかるべしとて、あとに、心を殘しつゝも、家路につきぬ。

雜報

●高等女學校　をば、このたび仙臺市に設立せんとの計畫ありと聞く、抑、女子の教育を普及ならしめん爲には、學校は、最、必要なるものなれども、其の方針一歩を誤りたらんには、其の害を及ぼすもの、亦、頗、大なれば、これが責に任ずるものは、必、輕忽に付すべきことにあらず。又、其の學校に就て學業を修めんとする女子にありても、亦深く注意すべきこと肝要なり。すべて人の學問は、たゞ、一時の利を謀るが爲に非ずして、百年の身心を定め、人生當然の務を盡くすが爲なれば、ゆめ、忽にすべきことにあらずかし。近來、女子敎育を憂慮する人あるは、大に喜ぶべき所なりといへども、其の主義の、猶、歐化主義なるもの多きは、吾人の、尙、患とするところなり。只、願くは、今後、益、日本主義なる學校どもの盛にならんことを。

●外國の女權　と、我國の女權とは、固より、比較すべきものにはあらず。然れど、今日の如き、歐風の盛なる我國なれば、國體などの差異あることなどには、露心づかずて、妄りに、外國を尊び外國風を慕ひつゝ、女子の權理などを擴張せんとて、猥りがはしき擧動、傲慢なる言論をさへなすものあるは、我國の女德には、いとも、大なる害あることなり。さるを、一向に、憂とせぬ人の多き

きこそ、こよなう慨たけれ。あはれ、我國の道を明めたらん諸嬢には、如何に思ひ給ふらん、吾人は、諸嬢の内外のさかひをよく辨へ、彼と是との國柄をよく知り給はんことを切に望むものなり。此頃のことにも、彼の佛國元老院は、商業に關係ある婦人に商業裁判官撰擧權を付與することに關する法案を可決せりといふ。是ぞ婦人に投票權を與へたる制度の第一着なりといへり。吁、是、彼の我が國との大差あるものならずや。我國の女には、女權などとは、古より唱ふるものゝなきなり。まして、男子の如き權をバ有することは、万々もなきことゝなり。さるを、此の如きことを以て例として、我國の女子にも、かゝる權あらしめんといふものは、我國の女德を壊らんとするの甚しきものなり。諸嬢正理に從ひ邪説にな惑ひ給ひそ。

●春信　は、先、梅花より傳はれり。龜井戸、向島、杉田などの名所に、春を探らんと、日曜などに出で立つは都の人のなべての習慣の樣なり。女も男も、おしなべて、稍、咲出でゝ、ことに薫りゆかしき梅の、紅に匂へると、白雪の如梢に積れるが、打交りたる、園の中林の邊に逍遙しつゝ、日も暖かに、風も長閑なるを娯しみ、數日の鬱も散らし果てゝ心神を養ふ人も多かるべし。されど、中には、いとも、猥がはしき男女などの、醜しき振舞などして、戯れたるも、まゝ見ゆめり。花を觀るはよろし。春を尋ぬるもよろし。朋友相伴ならはよろし。知人相語ふもよろし。されども、若きものゝ猥りがはしきは、これをいかにせん。褻れ〳〵しき樣あ

るは、これをいかにせん。學問と品行とは、すべて一致せではあるまじきことを、誰かは了解せざるものやある、知りても、尙、行を愼しまぬは、誰の過又、誰の恥辱となるべき。見ん人も聞かん人も、省戒め給へかし。

◎金圓下賜　德島縣に於て、去月中に金圓を下賜せられたる人々は左の如し。

宇多郡松ヶ江村大字北小泉士族荒數馬妻　よし

資性溫順克く舅に事へ夫數馬明治十三年中風病に罹り身體不隨にして農事を營む能はす一家數口饑渇に瀕するに及ひて纖弱婦女の一手を以て耕耘勞働に從事し服藥備に醫看護其至情を盡し能く一家を保持するのみならす心を子女の教育に致し又公私の義務に懈らす其操行堅實十數年の久しき一日の如し洵に奇特とす仍て其賞として金六圓下賜す

名東郡新居村岸田龍藏妻　かつ

稟性順良其嫁するや家計に精勵し夫及其祖母に奉仕して孝養の道至らさるなく昨年四月祖母の疾病に罹るに及んて夫と共に看護撫按し湯藥怠るなし其志操の堅き殆んと二十年一日の如く洵に奇特とす其賞として金二圓下賜す

兼題

三月廿日
- 歌　海上雲
- 文　春の野に遊ぶ

四月五日
- 歌　花條
- 文　山櫻の感

教の庭

三月五日兼題　雛遊

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　住所不詳　堀岸かと子

九重のむかしのさまもしのばれて
　いとゞゆかしきひなあそび哉

地　本郷區東片町百六十一番地　塩井長子

少女子がいはふひゝなの遊びよも
　をさまるみよの春ぞしらるゝ

人　肥後國菊池郡隈府町　千々波橋子

いもとせの契かはらぬためしとて
　代々につきせぬひな遊びかな

石井德子

桃やなぎさして彌生のひなまつり
　うき世のうさをけふぞ忘るゝ

片岡光子

雛床にさしたるはなをながめつゝ
　もゝとせまでも遊びてしかな

永井さい子

うらわかき春もふたゝびの乙女子が
　ひゝな遊びは見るもたのしな

新沼すゑ子

乙女子が雛のあそびにうちむれて
　うら楽しげに見ゆるけふかな

新沼よし子

桃の花さきいでにけりをとめ子が
　ひなのあそびの床のかざりに

留守巨梅

かざりつゝ雛のすがたを見る毎に
　ならのみやこのむかし思はゆ

內田慶子

思ふどちまとゐなしつゝ乙女子が
　ひゝな遊びにむつびころかな

佐々有鄰子

大宮のすがたうつしてをとめ子が
　祝ふひゝなのおもしろきかな

桃さくら花のにほひもけおされて　むかしおぼゆるひな遊びかな　小橋　幸子

乙女子が桃やさくらをかざしつゝ　ひなをまつりてあそぶ今日哉　大橋　兼子

ふみまなぶ親しき友のうちむれて　雛あそびする今日ぞたのしき　諏訪　晴子

やすらけき御世の恵のひなあそび　賤がこゝろもたのしかりけり　平野　鶴子

くもりなきわが大君の御すがたを　かざりていはふひな遊びかな　平野　君子

うるはしき心のよそにあらはれて　うらたのしげに見ゆるひな哉　土生　清子

ひなかざりをさな心にたちかへり　ともにたのしく遊ぶ今日かな　高井　米子

うちむれて祝ふ少女のひなあそび　世を渡るべきをしへとぞみる　上野　兼子

少女子が桃の小えだをかざしつゝ　たのしくあそぶ初ひゝなかな　河野　文子

まとゐしてむかしを忍ぶ少女子が　志賀　操

ひゝな遊びぞたのしかりける

昔よりならひとなりしをとめらが　ひゝな遊びぞゆかしかりける　鈴木　哲子

桃の花にほふやよひのひなあそび　むかしゆかしき心地こそすれ　水野むら子

楽しきはひなのあそびに少女子が　おもしろげなる笑顔なりけり　瀧口　信子

なくさまん心すさびはおほけれど　雛あそびして今日もくらしぬ　神田　春子

少女子がくる年ごとにかしづきて　いはふいもせの紙ひゝなかな　横山須賀子

桃の花ゑみさかねたるをとめ子が　すさびゆかしき紙ひゝなかな　横山　栁子

桃のはなかざしにさして少女子が　ひゝなあそびのおもしろき哉　師岡千代子

くもりなき御代のしるしと桃の花　かざしてひなの遊びするかな　青木　春子

咲く桃の花をかざしてうまざけを　くみつゝいはふひなまつり哉　岡　さは子

初さくら咲くやゝよひのひな遊び　青柳きよげ子
これやみ國のすかたなるらし

長き日もこゝろいそなく少女子が　植木　鋼子
ひゝな遊びにくるゝころかな

嬉しげにうちつどひつゝ少女子が　江馬　信子
み酒さしかはす雛あそびかな

少女子が長きはる日に千代こめて　佐氣　敬子
うらたのしげにひな遊びせり

いもとせのむつましかれぞ年毎の　佐氣　蝶子
雛のまつりのたのもしきかな

うちむれてうら樂しげに祝ふなり　洲岸　政子
待ちにまちけんひゝな遊びを

睦しくうからはらからまろゐして　松田　靜枝
ひなのみまへにあそぶ樂しさ

ひゝなにと供へし桃のはなの色に　松田　孝子
つどへる人の醉ひにけるかも

處女子がもゝよろこびの色みえて　橋本めぐみ
ひゝな遊びのにぎはしきかな

少女子がてゝろもちひのはゝこ草　臼田　民子

はゝもたすくるひな遊びかな

今日のみはうひ〳〵しくも少女が　上田　國子
うれし顔なるひなあそびかな

行末の千代をかけつゝをとめ子が　橋爪　乙女
まゐるひゝなの遊びたのしも

桃の花なりかざしつゝはらからが　志村せん子
うら樂しげのひなあそびかな

少女子がひなの遊びにむれつどふ　莽　しづ子
もゝの園生はにぎはひにけり

梅の節さくらのいろ香もちそへて　板倉きん子
ひなあそびせんもゝの園生に

雛まつりあそびたはむれもゝ園に　石井いと子
つどふ少女のこゝろのどけき

百年もかはらぬ御代のためしとて　佐々せい子
ひなあそびする今日の樂しさ

年毎にかはらぬはるのひなあそび　櫻田登代子
もゝの色香もそふこゝちして

打つどひひなまつりして賑はしく　村田みつ子
あそぶ少女のおもしろげなる

桃さくらかざすもをかし少女らが
むかしかはらぬ雛あそびして　村田清子

少女子が指折りかぞへまちわびし
ひなあそびする時は來にけり　辻やす子

すがのねのながき春日も忘られて
樂しくあそぶひなまつりかな　野田もと子

袖たれてをさまる御代の春なれば
ひゝなあそびぞ樂しかりける　土屋てい子

少女子がすさびのひゝな見る毎に
おのづからなる道をしるかな　加藤きみ子

ひなまつるけふの遊びに少女子が
百よろこびのいろぞ見えける　薬師寺芳子

少女子が祭るひゝなをもゝのはな
ゑみほころひて祝ふなるらん　小野秋子

宮つかへする心地してなりさかる
みにも嬉しきひなまつりかな　横山きみ子

三月五日兼題　紀行

天

府下芝區三田四國町　師岡千代子

古の史見るたびになつかしきは鎌倉にまさる所やあらざらむさるをいつの年もさはりありてえゆかれざりしを此の月の末つかた父君に伴はれて姉上とともに行きぬいと嬉しくてまだ曙のほのぐらきより起出でゝ一番の滊車に品川より乘りつ戸塚に至れるは七時すぐる頃なりければ幼き童どちの學校に通ふがあまた見えぬあはれ開けゆく御代の忝けなさよ今三四十年の昔ならむには此處にて今日はくれなん物をこの滊車といふものゝ萬便りよき事よと父上ののたまへば姉上は學の道の至らぬくまなき御代のめぐみのかしこさなど打かたらふほど大船にいたりぬ此處よりは車をのりかへて八時ばかり鎌倉の停車場につきぬ由井が濱遠くかすみて松原つゞきいと賑々し車を下れば華表見ゆ何ぞと問へば姉上八幡宮のならんといふ八幡宮とは鶴が岡のにやと嬉しくて足も空にてまづ石の階その

ばりてまうづ山によりていとたかく尊き宮なりけり開會中なる懷古展覽會を見る珍らしきものいと多くそゞろに當時の事を思ひ出されぬかへらんとすれバ宮司逢ひまつらんあなたへと案内の人おこせられたれど急げど父こそとてまかりぬ社前の銀杏いと物古りたり幾何の年月をかへぬらんと問へば父上公暁禪師はこの木かげより出でゝ右大將を害せし也とのたまふ見るからいとすごし正面に神樂殿左に若宮白旗神社あり靜の舞ひしはこの若宮なりとぞ今はたゞそのおもかげをしのぶのみといへバ姉上

しづやしづ賤のをだまきくりかへし
　うたひし人をしのぶけふかな

吉野山入にし人をしたひけむ
　みさをぞ雪に現はれにける

白旗神社は近きころ建られたりと見えていと異樣なり後を大臣山と云ふ大臣とは鎌足公をさしたるなりとかさては昔鎌を埋めたる山なれば鎌倉といふなりなど物語りしつゝ行くに神奈川縣師範學校

ありいと廣う閑かなる處なり途に右府公の墓嶋津忠久大江廣元の墓あり鎌倉の宮にまうづいと清々しき神殿なるに拜殿より初めて幕引はへて御祭などあるさまなり傍に二の社あり父上こは南の方村上義光ぬしのなりとて拜み給ふにおのれらも拜みつゝ親王に仕へまつりて甚しき功績ありけることなどしのびつゝ土の窟をかまんとて行くに神官に逢ひぬよき折かなとて案内せられて神殿のうしろの方にいたりぬ山にそひて石の階ありて瑞籬いと嚴なり塵うちはらひて登れば又垣ありて其の籠めまつりしといふ窟の入口にも柵し渡したり此處ぞ大塔の宮をこめまつりし處はと云はるゝにてこにかゝる處にとむかし姉上もおのれもしのびは物もおぼえずそのさま右より左へ曲りたりと見えたれど暗くして日影だにもるべくもなし古へ土くもとやらんのこもれりし處ならんおのれらだにかた時も立入らるべき處にあらぬをあはれいかに亂れたりし代とはいへ天つ日影のかくれし世なりともかゝる處にこめまつりしかの尊氏兄弟の罪何

にかたどへん憎しかしてこしぞはおろかなり數ならぬぞ其の折にあらましかバいかで御楯の數にもならましをど狹き袂を志ぼりもあへぬに姉上はされぱこそ高山ぬしは等持院にいりて木像鞭たれしなれさてこそ父君等は三代の木像打とりて三條河原にさらし順逆の道を示し給ひしなれかの唐の岳武穆の廟の前に秦檜の像ふませたりしも物かはなど時の移るもわすれしを益なき事ど云ひいでぞと父君の言葉に心つきぬるも嗚呼なりけり神官の言ふをきけバこを折まかりて左の方に疊八枚バかりの廣きところありそこに御座しまさしならんとぞあたりの苔露けぐく吹くる風腥き心地す姉上ある人の

岩やどに君かくれすむ三吉の丶
　月も都にすむべかりしを

とよめるもさる事にこそとて御首を捨奉りし處御陵墓など遙に拜みて行在所をもをがみぬ今日しも皇太皇后の宮の御幸せさせ給ふど承りてさては神殿のみ飾したるも宜なりけりと思ひ合せられぬそれより北條九代屋敷何の舘趾など見て角正といふやどへかへりしは十一時むかりなり晝飯志たゝめて小袋坂化粧坂を行く少將のおもゝげ今何處にかあらんたゞ麥生の風に戰ぐのみ

今はたゞその人もなし化粧坂
　そのおもかげはおもひやれども

白旗山といふありいと高し右府公の初めて旗上したる處なりとぞ此處を公園地となさんと企つる人ありとかきゝぬ建長寺にいたれば境內いと廣く建築物ふりて名高き寺なりけり圓覺寺壽福寺など見ついづれも此地五山の內なり山內扇谷などたゞ名のみなるぞあはれなる畑の中道わけゆきて長谷の觀音堂よいたる山高くして眺いとよしをかしき處なりといへバ父上大和の初瀨のめでたき事など語り玉ふに姉上

こもりくの初瀨のおくやいかならん
　こゝを見てだにあかれぬものを

權五郎景政社大佛など見て極樂寺にいたる途に星月井とて水をひさぐ嫗あり昔は名高き井なりけむ

今は昔ひしてさのみ消からず
　くみ見てもうつらざりけり古の
　　　かまくら山の星月の影
あし多くとらすれとこはかたじけなし今一つ飲めなといふ姉上もおのれも極楽寺とくたづねバや阿佛尼の住みしあと訪はゞやといそぎゆきぬ極楽寺にいたりて阿佛房のあとは月がけのやつとはと問へと知る人もなし大方は麥畑となりはてゝ打なびく穂波の答へ顔なるぞあはれの限なりける門前を流るゝを極楽寺川といふ日蓮上人けさかけの松大館又氏主従のなと途すがら見て稲村が崎にゆく海いとはるかに浪のよせくるまに〳〵浮きてたゞよふ蜑小舟大島江の島なと遠く近く見ゆるいとおもしろし左中將君のむかしおもひ出られて
　うけひかぬ浪なかりけり劍太刀
　　君がためにとなげしまことを
といへは姉上
　そのかみをしのふ袂にいとゞしく
　　かゝりもするか沖つ志ら浪

片瀬村をゆきて藤澤より滊車にて三時二十分バかり横はまにつきぬそこなる親類かりおとづれて例の路を八時バかり朧々たる月に送られて家居にと歸りつきぬ
　年月を志のびわたりしかまくらの
　　ふりぬるあとをけふみつるかな
　たづねれバ鶴が岡べの松にのみ
　　昔ながらの風に吹ける

地　　肥後國菊池郡城北村　佐々有鄰子

官幣中社八代宮の大祭には年ごとに詣でたまふ父君の今年はあしわけ小舟さはりあれバ母ぎみぞかはりて詣でたまへるその御供のつらにいりて立いづ
　たらちねの母の恵の深ければ
　　はしる車の音もさやけし
午後四時すぎに熊本市の旅館につきぬ白川に臨める高樓に端ゐして
　白川の波をわたりて吹風は
　　あつさをよそに流しつるかな

今日は八月の一日なり終日の汗衣をかきやりすてふしどにいりぬ二日朝とく旅館をいで宇土町豊福のさとなどすぎて小川のさとにさしかゝるをりしも道のゆくての山ぎはに元寇亂のをりにたけきいさをせし竹崎秀長の城趾みゆとて母きみの指さしをしへたまふ言の葉にむかしをしのびいでぬその戦狀をものせる繪巻物は希有のものにて今は久かたの雲の上にめされて御物となりぬと承りて

竹さきのたけき勳は大日本
　國のひかりをあらはしにけり

宮地のさとにいたる征西大將軍式部卿懐良親王の御墳墓に詣づ築地あり御門ありて老樹繁茂し晝なはくらき所なり袂にあまるは懐舊の涙のみ

松の風谷の水音むせかへり
　むかしのさまを語りがほなる

日影のかたぶきぬれば車を二人してひかせ一里餘の大道を夢のまにすぎて八代町なる松井家につきぬ家刀自なる竹子ぬしは母きみのゆかりの人なれば中垣結ぶ心もなくつかれしまにくうちふしぬ今日の道の程は十二里にあまれりとぞ夜半ばかり門の戸たゝく人ありたれならんとおもへど今朝旅館をとく立出て妾どもを待べくちぎりし老男内村徳秀になんありけるおくれしことのあなにくやとつぶやけどかひなしや

三日大祭拜み奉らんと竹子刀自のしりへにつきて出たちぬ官幣中社は舊八代城の本丸にありていかめしき宮殿なれば仰ぐもかしこきところなり定時より式はじまりぬ宮司松井のきみの緋色の服をつけられたるは五位の品なるべし禰宜主典の神職たちも祭服に色めありていとがうくし物のね高うすみわたりひらでの音ひゞきぬるは奉幣使の拜禮なめり

糸竹のしらべをそへて清々し
　いがきの松をわたる朝かぜ

竹子刀自は

昔しのぶ城の上を渡る風の音も
　神をいさめの調べ成らん

寛永正保のころより維新の際まで此の城を守固め

し家なれど歌のさまもなにとなうむかしの情のう
かびしならんあなゆかし母きみの歌はほかにもの
したまふ紀行あれどいはず硯の海の玉は拾はで藻
くづのみかきつめぬるもはづかしや松井家の梅林
閣にまゐらす

人　　大坂市東區北新町　土屋てい子

けふは朝まだきより空晴わたりて風さへなくいと
あたゝかなれど心あへる友どち一人二人つれたち
て河内國讃良の郡甲かのさとなる四條畷の神社に
參りぬまづ京橋をわたりて片町といふを東へ行き
て鯰江村といふにいたりぬこゝなむ古戰場にて彼
元和のむかし今福堤の戰ひといふをおもひ出ぬさ
てとあるいほりにしばしいこひつゝ大坂なる大城
のあたりを近くうちわたして

きぬ垣も今はかすみと引かへし
　なにはの御城の春を見るかな

と口ずさびてやがて徳庵堤といふ永き堤を行く是
は寢屋川に添ひていと永しはるかに生駒山を見わ
たして

生駒山うごかぬ雲とみえつるは
　曇るどかりの霞なりけり

それより諸福赤井のさと／＼をすぎて角の堂とい
ふに出ぬ是より北へ永き堤を行て津の邊のさと北
條のさとをすぐれば即ち甲か村なり石の鳥居を入
りて東の山に小楠公の御社いかめしくたゝせたま
へりやがて御前にまゐのぼり拜み奉りて

天の下仰がぬ人のなき神に
　申しあくべきことのはもなし
まをさんと思へばむねにせまりきて
　たゞうなねづく外なかりけり

御前をまかりて四方をみわたせば西はありま山六
甲山より淡路の邊までしら雲のうちにみやらる北
は淀川交野のわたり南はなにはより堺の浦遠くう
ち晴れて東は山なり其峯は飯盛の古城跡にてむか
しを忍ぶよすがには松風の音のみ殘れりかくて御
墓に參りておくつきを拜むにそゞろになみだぐま
れければ

おくつきのみまへの土にひれふして

さゝぐる物はなみだなりけり

と口ずさひつゝ御前を立て津の邊より舟にのりて家にかへりぬ

橫山きみ子

人のすといふ紀行てふものおのれもして見んと折にふれてそこはかとなくかきあつめたる事共三ッ四ッあるを今そが中の一くだりを取出て左にものするになん

二月十二日今日は母のふるさとおとなはんと兼てより期したる事なれどあさげとくすまして母もろ共に立出ぬ道のりは二里にも足らはぬ程なれど山を越え川を渡りて車も通はぬ道なれバ力と頼むは只一もとの杖のみなりけりされどていけよくさし出る朝日のにほひうらゝかに吹渡る春風のこゝろやはらかなりけれどそゞろに心うれしき道なりけり山路にかゝれど谷かげの梅南の枝に三四二咲そめて鶯の聲打まちがほにうちほゝえみたる坂の勞れも忘れん斗りいとおかし母のきみ歌あり「鶯のふる巣につげんよしもかなはや谷かげの梅はさきぬと」川邊に出づれど堤の柳まだ色そふとみはあらねども春風に打靡きてかなたこなたにくりかくすさままたなくなつかしおのもまた「そめあへぬ柳の糸も春風にこゝろとけてや打靡くらん」など口ずさみつゝ行く程に到り着きぬ伯父の君も伯母の君もみながら家ゐしたまひけれど母もいとなんうれしく打くつろぎて四方八方の物語し給ひきおのも從姉妹の君たちと庭にをりたちかなたこなたにたゝずみてこれなん母の幼かりし時手植ゑ給ひし姫小松なりかれなん伯父の君の稚かりし頃遊び給ひし岡なりけりなど聞き待りたるごよなうゆかしかくて日もいたく傾きけれど暮れぬ程に歸らまほしとの給ふものからあかぬ心地ながら暇つげて立出ぬ折しもあたりの村の人なりけん若きをのこだちあまたうちつれたちて何なりけんのゝしりつつ歩み行くあり又少女たちの今日をはれとやおもひけんきはひかざりてむれゆくあり道もさりあへぬ程なれバいぶかしくていかでかくは賑く何處に

行ぐならんと問へバ母のの給ふようこのあたりのならひにて陰暦正月七日某寺に七草會てふ法會營まるゝを通夜とて夜一よ男も女も御堂の内に參籠する事なり今日しも其日に當りぬれどそれに詣づる人どもならめどさてもいまはしきならはせかな佛に詣づる事あしとどがむるにはあらねども男女は七才にして席を同うせずとかやきゝ侍りしをいかにあまさがるひなとはいへ敎への道の開けぬ里なき聖の御代の今の世にかゝるいまはしきふりの殘る事返すゞもうれたき事の限りなりと歎き語らひつゝ先きも急がれぬれバちかみち求めて行く程に一つのはげたる小山にかゝりき枝ぶりいとおかしき小松あまた生ひたれど鉢植の小松一もとはしと父の君のの給ひし事のおもひ出で子の日をまねぶにはあらねども父の君の千年のためしに一もと引きて家づとにせバやといふを母もさてぞとの給ひければいとうれしくてかよはき力はりこめて二本三本引きもて歸りぬかくと父に告げければよくこそかくはとの給ひし甲斐ゞしさいはんかたなくうれしかりけりやがて日も暮れはてければふづくゑに向ひて小夜のすさびにありし事ども聊かきしるすになん

投稿心得

一兼題歌文は婦人は何人にても隨意に投稿することを得但一週日前に本社に屆くやうすること

一投稿者は宛名を國光社編輯部とし用紙は白紙にても罫紙にても半紙を用ゐ文字は鮮明に書くこと特に投稿者の宿所姓名を詳に記すること

一投稿歌文中より天地人の三首を撰り天に三部地に二部人に一部女鑑を送呈す並にすべての歌文に原稿到着順に女鑑敎の庭に掲載す

國光は忠孝節義の士氣を激勵し固有の美風良俗を扶植し以て邦家進取興隆の基礎を鞏固にし殖産軍備教育の法廣く宇內の秀美を蒐め富强の策を講するを務とす其時事を評し活勢を論するに當りては公平の眼を以て大局の上より國家の利害を觀察し太古に溯り萬世に亘り時流を趁はす世好に投せす卓然獨立正言公議眞理中道を得以て國光を世界に照被するを旨とす

國光

毎月二回發行
十日廿五日
一冊代金拾三錢
但國內無遞送料

國光第七卷第九號目錄

發行所　京橋區築地二丁目　國光社

副島伯爵校閲
東久世伯爵著　松本楓湖書

尋常小學修身書　全四册　每册七錢八厘

全　教師用　全四册　上製各册十二錢

高等小學修身書　全四册　每册九錢七厘

全　教師用　全四册　上製各册廿五錢

中學國史　全六册

高等小學國史　全三册　每册十九錢

尋常小學國史談　全二册　全十錢

發兌所　國光社

女鑑第五十七號目次

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月貳回五日廿日發行

定價壹册金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿七年三月四日印刷
同年同月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人 川崎直衛
同 編輯人 山根勇藏
同 發行所 國光社

(印刷所 東京國光社印刷部)

(明治二十四年八月八日內務省許可 明治廿五年三月十二日遞信省認可)